

---

# IS-戦いを求めるもの

志祈月織

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS - 戦いを求めるもの

### 【NZコード】

N3918X

### 【作者名】

志祈月織

### 【あらすじ】

戦いが好きだ。戦つて、戦つて、戦いあいの末に、戦いたい。  
だから、あの日出会った彼女はまさに運命だった。  
俺より強く、凛々しく、美しい。俺は、彼女に勝つために銃を取り、  
技を磨き、戦略を学び、すべてをかけて戦った。  
直向に彼女を求め、それはいつしか愛情となつた。

ISで男主人公の一次創作です。一夏の幼馴染という設定です。テンプレ、ハーレム要素、最強、ご都合主義を含むのでご注意ください

さい。

途中で更新が停止したら「めんなさい。

## 再会と再開（前書き）

投稿するのが初めてなので不備があれば教えてください。  
あと、感想はどんどん募集しております

## 再会と再開

「全員揃つてますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

そう、にっこりと微笑むのはこのクラスの副担任、山田真耶だ。高校一年生である俺と同じか、それよりも幼く見える彼女は、まるで子供が大人のマネをしていますよ、といった風に教室を見回す。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願ひします」

どちらかといえば、こちらがよろしくする側ではないだろうか。と山田先生の姿にそう考えてしまう。

教室中が俺と同じ考え方なのか、それとも別の理由からだろうか。クラスの誰も反応を返さない。

おそらく、一対八くらいで後者の割合が多いだろう。

「え、えつと……。じゃ、じゃあ自己紹介をしましょうか。出席番号順にお願いします」

その場の沈黙に耐えられなくなつたのか。山田先生はうろたえながらそう告げた。

まつたくもつて、教師に思えない。

まあそれはそれでおもしろい。それに、その小動物を思わせる姿は年不相応にかわいい。これは、年齢より幼いという意味だ。

もつとも、俺よりも前方。クラスの真ん中最前列というお誕生日席に座る友人、織斑一夏はそんなことないらしく、引きついた顔で居心地悪そうに座っている。

ちらりと、幼馴染である篠ノ之箒に助けを求めるが、無視される。それにつ落ち込む一夏だが、まあ無視された理由には思い至つてないだろう。

まあ、俺個人としてはおもしろいから問題はない。だいたい、一夏もだらしない。せつかくこんなおもしろい状況に置かれたのだ。少しは楽しめばいいものを。

と教室中を軽く見回すが、俺と一夏以外の生徒は女子ばかり。そ

れだけではなく、この学校すべてを見ても、男子は俺と一夏だけ。他はすべて女子なのだ。

「んなハーレム状況。楽しむな、といつまつが無理な話だ。

「……あの、織斑一夏くんっ」

「は、はいっ！？」

山田先生の声に、一夏は声を裏返しながら答えた。

どうせ、現実逃避でもしていたのだろう。

「あ、あの、お、大声だしちゃってごめんなさい。お、怒ってるかな？」

とひたすらに頭を下げる山田先生。うむ、教師とはとても思えない。まるで一夏にいじめられて謝っているみたいだ。

「いや、あの、そんなに謝らなくても。自己紹介ですよね。します、しますから……」

なんとか山田先生をなだめる一夏。これじゃ、ビッチが年上だかわからないな。

一夏は立ち上がり、机を振り向いた。

「え、えっと。織斑一夏です。よろしくお願ひします」

そう、当たり障りのない無難なあこがれから始めるのだった。

振り返れば俺たちがここ、EIS学園にいるのは一夏が原因だらう。本来、俺たちは私立藍越学園に入学するはずだつた。

俺としては高校などどこでもよかつたのだが、一夏がそこを受験するといったので、俺もそこにしただけだ。深い理由などない。なので受験会場やその他諸々などは特別調べることもなく、すべてを一夏に任せて受験会場へと向かった。

そこで運がいいのか悪いのか、一夏と俺はEISを起動させてしまつたのだ。

インフィニット・ストラトス。通称、EIS。

簡単に言えば、この世で最強の兵器だらう。まあ、それに色々異

論はあるのだが、世間一般の評価といえばそんなもんだ。ついでに、女性しか起動できないといわれていた。

そう、過去形だ。俺と一夏がHSを起動させたことでその常識は壊された。

その事実は世間や国、つまるところ世界を大きく震撼させた。

俺たちはそのなんだかんだといたゴタゴタの中、本人たちもよく知らないさまざまな疑惑があり、その結果としてこのHS学園に入学させられたのだ。

すごい大雑把な回想を終える、一夏はまだ立っていた。先ほどからなにもいつていない。

教室中が一夏に注目をする。期待が高まる中一夏は、「以上です」

何人かがぎこけた。俺としてはまあ、予想通り。あいつがこの空気の中、おもしろいことをいうことなどできない、という程度には幼馴染であるあいつのこと理解している。

バアンッ！

突然響いたその音。それは、いつの間にか教室にいた人物が、一夏を出席簿で叩いた音だった。

「げえつ、関羽！？」

バーンッ！と一撃目。すばらしい一撃だ。惚れ惚れする。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者！」

はたして、その人物は誰かというと、なんてことはない。織斑千冬、一夏の姉だ。このクラスの担任になることは聞いていたが、遅かつたな。

「あ、織斑先生。もう会議は終わったんですか？」

「ああ、山田くん。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつたな」

「どうも、遅れたのはそういう理由らしい。」

「い、いえつ。副担任ですから、これくらいしないと……」

先ほどより熱っぽく話す山田先生。

なるほど、この先生も千冬の信者かにかかる。

千冬は世界中のI-S乗りの憧れで理想だ。山田先生のよつた反応をする人は初めてではない。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てる」が仕事だ。私のことをよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五才を一六才まで鍛え抜くことだ。逆らつてもいいが、私のいづことは聞け。いいな」

いきなりの暴力宣言。教師といつより、前にやっていた軍の教官に近いな。

「キヤー！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「私、千冬様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉さまのためなら死ねます！」

とこんな感じだ。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだな。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

本気でうつとうしがる千冬。そんなことなど氣にも留めず、

「きやあああああっ！ お姉さま！ もつと叱って！ 鳴って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように隠けて！」

「このクラスはドMの集まりらしい。」

「で？ 挨拶も満足にできんのか、お前は？」

「いや、千冬姉、俺は……」

バーンツーと二度出席簿が振り下ろされる。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

とこんなやりとりすをすれば、教室には一人が姉弟だとバレるのは当然。

「え……？ 織斑くんって。あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、世界で一人目の男で『EIS』を使えるっていうのも、それが関係して……」

「ないよ。一夏も俺も、EISが使える原因は不明とされてるが、俺は大体の予想はついている。おそらく、千冬もだ。一夏は、まあ気づいてないな。

あと、どいつもこいつも千冬に幻想持ちすぎ。一度、家でのぐつたら具合を見せてやりたい。

「おい、そこでニヤついている馬鹿者」

「……俺か？」

「どうも、表情が表に出ていたようだ。別に隠す気もないけど。  
「そうだ。ついでにお前も自己紹介をしろ。いつておくが、マジメにやれよ」

「その千冬の田は、ふざけたらどうなるかということを物語つくる。さすが、千冬。俺のことをよくわかっている。俺がこの状況で、どうこう行動をとるかということはお見通しというわけだ。  
なら、その期待に応えるとしよう。

「みなさん、はじめまして。師河美鶴です。一夏と同じく、男ですがよろしくお願ひします」

教室中の目線が、俺に集中する。うん、悪くない。

「好きなものは女の子。趣味は女の子をナンパすること。将来の目標はハーレム建造です。叱つて罵つて優しくして躊躇くて欲しい人は、俺に一声かけてください」

一瞬の沈黙。そして、

「キヤーー！ 肉食系よ、肉食系男子だわー！」

「すごい、かつこいい。躊躇くて欲しいー！」

「あの、今晚暇ですか！？」

などと教室から歓喜の悲鳴が上がった。今更だが、この教室にはバカしかいないのではないだろつか？

そんな中、千冬は静かに俺の席まで歩いてくると、

「マジメにやれといつただひづが、馬鹿者ー。」

出席簿を振り下ろした。

俺としてはこうなるだろ?」とはもちろん予想していたので、身を捻りそれを避ける。

「……避けるな」

「だつて、当たつたら痛そうじやん」

現に、風圧だけで前髪が少し切れた。一夏へのものよつ、明らかに殺傷力が高い。

「……ふん」

もう一撃。俺はそれを机の上にあつた入学案内書を丸め、簡状にして受け止める。

「おいおい、危ないな。なに怒ってるんだよ?」

「教師として、生徒が不真面目な態度を取つたら指導するのは当然だ」

「体罰だろ、これ」

「訴えられなければ問題ない」

と会話する間も、出席簿と筒で打ち合ひ。やばいな、強度的にこつちが負けそうだ。  
「う、うそ。千冬様と互角に戦つている?」

「何者なの?」

そんな声も無視。そんなことよりも、今は千冬に集中する。千冬だけを、見つめる。

「ニヤニヤするな、馬鹿者がー。」

それは無理だ。こんな楽しいのに、笑みを抑えるなんてできしない。

互いに、速度を増していく。そして、

「……時間切れか」

「それは残念だ」

鳴り響くチャイムの音で終わりを迎えた。

ダメだ、不完全燃焼過ぎる。こんなにじや、ぜんぜん満足できな

いな。

「さて、これでSHRは終わりだ、師河、座れ」

「おーおー、冗談じゃないぜ。お楽しみはこれからだらう。千冬だつて、まだ満足しないんだろう?」

「織斑先生だ。もう一度だけだ。座れ」

有無を言わせぬ千冬の口調。それに、俺も幾分か冷静さを取り戻す。

俺は大きく息を吐き、頭を冷やす。つたぐ、俺としたことが。高校生活初日といつことで、気が大きくなつていったようだ。これだから、両親からはまだ子供扱いをされるのだろう。

「つとまあ、このよつに腕にも少し自信があります。みなさん、これからよろしくお願ひします」

そう締めくくつ、俺は座るのだった。

## 読むものたち回かつもの（前書き）

セシリ亞の性格がかなり改善されていると思します  
そういうのが嫌いな方は気をつけてください

## 挑むものと立ち向かうもの

そんなこんなで休み時間。この学園は始業式だといつのこときなり授業がある。まったくもつてめんじくさい。

そして廊下。俺と一夏を見物に、学校中から生徒が集めているようだ。当たり前だが、全員女子。

「落ち着かない」

そう零すのは一夏。俺は一夏の机に座り、答える。

「なにが？」

「なにが、じゃねえよ。見ろよ、廊下」

俺は廊下に笑顔で手を振つてやる。そして響き渡る歓声。

「うん、みんなかわいいな」

「なんでお前はそんなに余裕なんだよ……」

疲れたように、うなだれる一夏。

「おいおい、だらしないな。一夏も男なら少しほのハーレムを楽しめよ。あれだ、適当に女の子に声かけて飯でも誘つとかさ」

「出来るか、そんな」と…

だらしないやつめ。そつやつて女子に近づいてしないからいつ

までも女心が読めない鈍感野郎なんだ。

「……ちょっとといいか」

「え？」

「ん？」

突然、声をかけられた。そして、この衆田の中思い切った行動をするな。

「……筹建？」

「よつ、久しふり」

その正体は、六年ぶりに会つ幼馴染、篠乃野筹建だった。不機嫌そな顔の幼馴染にまずは一言。

「元気してたか？ 相変わらず景気悪そうな顔だな」

「余計なお世話だ！」というか、なんでそんなに軽いんだ、お前は「なんでもなにも、幼馴染に対して硬くなる必要もないだろう。それに、筈のお田当では俺じゃないんだし。

「一夏、話がある。いいか？」

「俺だけ？ 美鶴には？」

相変わらずの鈍感さ。「こには手助けしてやるわ。

「その、美鶴は、だな……」

「俺は少し用事があるんだよ。お前だけでこって来い。筈、また後で話そうぜ」

「あ、ああ。そうだな」

俺は立ち上がり、二人を廊下に送り出す。まつ、どうせ当たり障りのない会話で終わりだろ？ 一夏の鈍感さもともとことながら、筈も案外へタレだからな。

「それで、何か御用ですか。お嬢様？」

「ええ、もちろん。ちょっと、よろしいかしら？」

振り返ると、そこには金髪美少女が立っていた。気の強そうな瞳で、俺を見ている。

「もちろん。俺は女性のお誘いは断らない主義なんですよ」

「相変わらずの八方美人ですね。いつか背中から刺されますわよ

「それは怖い。せいぜい、気をつけるとしましょう」

そう、俺はにこやかに笑った。

「あと、いい加減その他人行儀な話し方はやめてくださいるかしら。不快ですわ」

「はっ、最初に言葉使いに気をつけろっていったのはそっちだろ。お嬢様」

俺はがらりと口調を変える。別に、下手に出る理由もないし。

「そのお嬢様、といふのはやめてくださいるかしら。わたくしにはセシリア・オルコットといふ名前があるのです」

知っているよ。イギリスの代表候補生で専用機持ち。今年の一年生の中でも指折りのエリートだ。そして、俺の顔見知り。

「ははっ。元気そでなによりだな、お嬢様。それに、予想通り美人になつた。俺の女を見る目は確かだつたか」

「お褒めにいただいて光榮です。あなたに認めてもらうため、研鑽を積みましたから」

「ああ、代表候補生になつたんだる。おめでとう、お嬢様」「そう思つなら、いい加減に名前で呼んでくださいますか」

名前で呼ぶ、といふのは昔交わした約束のことだ。お嬢様が、俺を惚れさせるくらいイイ女になつたら名前で呼ぶというものだ。なぜそんな約束をしたかといふと、過程は色々あるが、結論としてはお嬢様が俺に惚れたから。それを俺が拒否したから。

うん、なんて自分勝手なんだ俺。昔は若かつたな。今も若いけど。「さて、どうしようかな」

挑発的な笑みを浮かべる俺。もちろん、俺はそんなに惚れっぽくない。いや、女の子は好きだけどね。惚れるか惚れないかは別なんだよ。

うん、実に最低だ、俺。

そこで、授業開始のチャイムが響いた。

「さて、授業だ。席に戻ろうぜ。いつまでもここにいたら邪魔だ」

「そうですね。でも、私は簡単にはあきらめませんわよ」

「もちろん。そうじやないと張り合ひがない」

お嬢様は席に戻つていった。

あの口調。どうやらお嬢様はよほど自分に自信があるんだひつ。どんなことをしてくるか、実に楽しみだ。

「織斑くん、何かわからないことがありますか?」

記念すべき初授業。といつても、まだ初日だ。入学前にもうつていた参考書の内容を理解していればそう難しいこともない。理解していれば、だ。

「ほんと全部わかりません」

やけに自信満々に、醜態を晒すバカが一人いた。もちろん、一夏だ。

「ぜ、全部、ですか……？」

さすがの山田先生も、顔が引きつっている。

「え、えっと……織斑くん以外で、今の段階でわからないうつていう人はどれくらいいますか？」

そんなやつは、もちろんいない。

「えっと、師河くん？」

「なんですか？」

「師河くんは、大丈夫ですか？」

「もちろんです。入学前にもらった参考書は理解できていますから。この程度は問題ありません」

「なつ、美鶴！？」

驚いたように、こちらを振り向く一夏。

「なんだ、一夏？」

「お前、勉強なんてしてたのか？ 毎日俺と一緒にだろう？」  
その言葉に、教室がざわめく。おい、誤解を生むような言葉をいうな。俺に男の趣味はない。

「当たり前だ。ここは選ばれた人間しか入れないエリート校だぞ。ある程度の事前学習をしておくのは当然だ」

半分うそ。俺はEISの知識なら勉強しなくてもある程度は把握している。少なくとも、この学校で三年間で学ぶ知識程度は。

「なんで教えてくれなかつたんだよ！？」

「教えるまでもなく、当然だと思ったからだ」

「本音は？」

「おもしろそうだったから」

「ふざけるな！」

「口のセリフだ」

これで何度もか。千冬が出席簿を振るつた。

「まったく、恥を晒すな。大体、必読と書いてあつただろ？」「でも、千冬姉」

「織斑先生だ」

「同じく、一撃。ああ、痛そうだな。

「それで、肝心の参考書はどうしたんだ？」

「……破いた」

「なに？」

「握力がどれだけあるか試そうと思つたんだけじゃ。古い電話帳使おうと思つたら、間違えて……」

「馬鹿者」

「そして、もう一度バアンッ。

「あとで再発行してやるから一週間以内で覚える。いいな」「い、いや、一週間での分厚さはちょっと……」

「やれといつている」

「……はい。やります」

「がんばれよ」

「お前も、場を乱す発言をするんじゃない！」

「しょうがないじやん。

だつて、好きな子ほどからかいなくなるんだよ。なあ、千冬。

次の休み時間は、篠と一夏、俺の三人で会話した。一夏は怒つていたが、まあどうでもいいか。俺だつて少しば反省してるんだぞ。だから休み時間をこうやって幼馴染三人で話すこと、「回りの目が気にならないようにしてやつてるんじやないか。

本音は、一夏と話す篠の反応を見るのが面白かったから。

それで、授業開始。今度は、千冬が教壇に立つよつだ。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス代表者か。聞くからにめんどくさそうな名称だ。まあ、内容を聞けばまったくその通り。クラス長とかそんな感じの役職らし

い。

「はい、織斑くんがいいと思います！」

「私もそれがいいと思います！」

次々とあがるのは一夏の名前。どうせ千冬の弟だからって理由だろ？。俺としては、俺じやなればかまわない。そんなめんどくさい役職になれば、自分の時間がなくなるからな。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いないなら無投票当選だぞ」

さて、無事に一夏に決まりそうだ。

「師河美鶴さんを推薦します」

俺の思いとは裏腹に、余計なことをいうやつがいた。だれだよ？

「お前は、オルコットか」

「はい、そうです」

席から立ち上がったお嬢様だった。さつきの休み時間はなにもしてこなかつたから忘れてたが、なにかを企んでるな？

「そうね、確かに師河くんもいいわね」

「さつき千冬さまと互角だつたんだもの。きっとHISの操縦も一流よ」

やばい、めんどくさくなりそうだぞ。

「またた。俺はバスだぞ。いいか、よく考える。俺がクラス代表になつたら、女の子と遊ぶ時間がなくなるだろ」

「それがどうした？ それに、推薦された以上拒否権はない」

くそ、聞く耳もない。まあ、俺の理由を聞けば当然か。さて、どうする。

「織斑先生。よろしいですか？」

「まだなにがあるのか、オルコット」

「はい。わたくし、セシリ亞・オルコットは自分をクラス代表とし

て推薦します」

「ほう、どうじつつもりだ？ 他薦をしながら自薦とま」

「わたくしはクラス代表には実力トップがなるべきだと考えています。そして、現在このクラスでのトップはイギリス代表候補生であるわたくしだと自負しています」

「これは純然たる事実だ。他の生徒など、お嬢様に手も足もないだろう。

「しかし、それと同時にわたくしはより強い人物を知っています。

それが、美鶴さんです」

千冬が俺を見た。なにかいいたいって顔だな。

「……それで、なにがいいたい？」

「つまり……」

「どつちが強いか、決めようぜってことだろ？」「

俺は立ち上がると、お嬢様を見返した。くそ、おもしろいな。「なるほど、確かに簡単でわかりやすく確実だ。お嬢様が俺に勝てるってんなら、それこそ惚れちまうだろ？」

「ええ、そうです。こうなれば、あなたも断れませんでしょ？」

「ずいぶん大胆だな。こんなことしなくても、お嬢様のお誘いなら俺は断つたりしないのに」

「それは、わたくしの覚悟の表れだろ思つてください」

お嬢様は笑い、俺も笑った。互いに誘うように、挑発するように。

「それで、一夏はどうするんだ？ 別に逃げてもいいけど、俺とマジで戦える機会なんてそうそうないぜ」

事の成り行きを静観していた一夏に、声をかける。

「あら、織斑さんもですか？」

「あいつは俺の弟弟子みたいなもんだ。甘く見ると、痛い目に見るぜ」「なるほど、それはおもしろそうですね」「

で、肝心の一夏はどうするんだ。

「俺もやる。俺がどれくらい強くなつたか、美鶴に見せてやる」「つてことでどうだ。千冬」

「織斑先生だ。馬鹿者」

注意はするが、今度は出席簿はなしだ。さすがに俺たちの空気を読んだのかもしれない。

「わかった。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。初戦は織斑とオルゴット。その勝者が師河と勝負だ。異論はないな」

「ない」

「ありませんわ」

「俺、一試合だけかよ。まあ、いいぜ」

さてさて、楽しくなりそうだ。

扱るものとのどちらか一つの（後書き）

更新の頻度は遅いと思こますが少しづつがんばりたいと思ひます

## 変わらない者たち（前書き）

サブタイトルを考えるのが大変です

## 変わらない者たち

「ああ、織斑くん、師河くん。まだ教室にいたんですね。よかつたです」

放課後の教室。俺と一夏が互いに本日のことを振り返っていると山田先生がやってきた。

本日の出来事？ 女の子と一緒にお昼食べた、以上。一夏はぐつたりとしているが、俺は楽しい一日だったと思つよ。

「山田先生、なにか御用ですか？」

「えっとですね、寮の部屋が決まつたからお知らせにきました」

部屋番号が書かれた紙とキーを差し出す山田先生。  
はて、寮とな？ 確かにこの学園は全寮制だが、しばらくは自宅

通学ではなかつただろうか。

「あの、俺たちつて一週間は自宅から通学じやないんですか？」  
同じことを一夏も思つたらしい。

「そりなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したらしいです。……一人とも、そのあたりのことを政府から聞いてます？」

ああ、なるほどね。自宅にいたらマスクやら学習者やらがつるといつてことか。一夏も春休み中はそれで苦労して、俺の家に避難してきたつけ。ちなみに、我が家は俺のお母様がすべて撃退したし、その後は押しかけることもなくなつた。

きっと、昔のコネでも使つたのだろう。

「そういう訳で、政府特命もあつて、とにかく寮に入れるのを最優先したみたいです。あいにく、個室が一つと相部屋が一つしか用意できなかつたので、どちらかは相部屋になつてもらいますが

「一夏、相部屋な

「なんでだよ！？」

「俺が相部屋になつたら、女の子を部屋に呼べないだりつ

なに当たり前のことを。

「ふ、不純異性交遊はダメですよつ」

「大丈夫、俺は本気で女の子と遊ぶだけですかから」

それに、もう経験はしてるし。

「なにが大丈夫なんだ、馬鹿者」

鋭い殺氣。俺は身を屈めると、今まで首があつた場所を鋭いなにかが通り過ぎた。

「おい、首と体が永遠にバイバイするとこひだつたぞ」

「そりか。惜しかつたな」

当たり前だが、千冬だった。

「どつちみち一ヶ月もすれば部屋が用意できる。どつちでもいいが早く決める」

「じゃあ俺が個室でいいな」

「俺も個室がいいんだよ！」

「なんだ、一夏も実は女の子を部屋に呼びたいんだな。このむつりスケベ」

「俺は部屋でくらいくつくりしたいだけだ！」

まあ、一夏は学校では落ち着く暇がなかなかなさそうだからな。しようがない。

「じゃんけんだな。ルールは特になし。一本勝負で恨みつこなしだ

「いいぜ」

そして、互いにこぶしを構えると、

「「じゃんけんつ」「

と一夏はパーを出した。それはそれを確認し悠然と、

「チヨキつと。はい、俺の勝ち」

「後出しだろ！」

「ルールは特になしといっただろ。後出しが禁止されているわけではない」

「し、師河くん。卑怯ですよ」

なにをいつてるんですか、山田先生。勝負の世界に卑怯もクソも

ない。負けたやつが悪いんだよ。

「はははっ、悪いな一夏。せいぜい、同室の女の子と仲良くするがいい」

「べつ、どうせなにいっても無駄だから諦めるよ。……わかりましたけど、今日は荷物の準備に帰つていいですか？」

「心配するな、私が手配しておいた。着替えと、携帯電話の充電器があれば十分だろう」

うむ、見事に生活必需品しかないな。マンガやエロ本の一冊もないとは、かわいそうなやつめ。

「まあ、心配するなよ。俺が家からゲームでもマンガでもエロ本でも持ってきて貸してやるから」

「お前の分もあるぞ。玲子さんが準備してくれた」「なん……だと……。

「ちなみに、ゲームもマンガもない、お前が隠していたエロ本は私が直々に処分してやつた。ありがたく思え」

「……千冬よ、俺がエロ本読むの気に入らないのはわかるが、健康な男子高校生だぞ。持っていたくらいでその処罰。さすがに泣くよ？」

「勝手に泣け。あと、織斑先生だ」

くそ、かわいくないやつめ。そんなのだから女子の子からしか告白されないんだ。

「もういいな、いいなら早く寮へ帰れ。夕食は六時から七時だから遅れるなよ。あと、しばらく風呂は部屋のシャワーでがまんしちよ。いいな、師河」

なぜに俺に念を押す。まあ、わかるけどさ。

「なんでダメなんだ？」

「なんだ、一夏は女子と風呂に入りたいのか。やつぱ、男なりそうだよな」

「つー？ ち、ちがうぞ。入りたくないなんてないぞ」

「ええ、女の子に興味がないんですか！？ そ、それはそれで問題

のよつな……」

「そうか、一夏はやはり男好きだったのか。これからのはき合ひの方を考えないといけないな。

「距離を取るなつ。俺は普通に女の子が好きだよ!」

「バカなこといつてないで早く行け」

「バーンッ! と出席簿。うむ、そろそろ潮時だらう。

「わかつたよ、一夏行こつぜ」

「ああ、なんかもう疲れたよ」

俺は山田先生から紙とキーを受け取り教室を出た。その時、一言。

「あとでな、千冬」

千冬にだけ聞こえるように、そつねをやいた。

着いた部屋は、個室というだけあってあまり広くはなかつた。それでも、家の部屋よりはよほど広いし、生活するには十分だらう。

「さてと、荷物は」

ベッドの脇に置かれていた、キャリーバックを開く。

中には、着替えと洗面道具。当面の生活資金の入つた財布、その他雑貨があつた。確かに、生きるためなら十分だが、少しは俺の潤いも考えて欲しいものだ。

「それでつと」

着替えなどを取り出し、空になつたバック。その中を少し探ると、隠しポケットが開いた。そこは、着替えなどが入つていたスペースよりも大きく、そちらがメインとさえ思える。

そして肝心の中身だ。

「これだけか

入つっていたのは鋼鉄のワイヤー、大小さまざま大きな大きさ形のナイフ、拳銃と予備の弾倉と分解されたアサルトライフルだ。あとは暗色のコートにおまけのなんやかんや。

さて、なんでこんな物騒なものがあるかといふと、お家柄だと思

つてくれればいい。詳しい説明は面倒だからバスだ。  
まずは部屋の物色から。適当に部屋を漁ると案の定。

「大漁、いや大量か？」

出てきたのは、厳重に隠された盗聴器と隠しカメラ。どりせ、男子でIIS操縦者である俺を監視するために設置されたものだらう。まったく、俺のプライバシーを何だと思つてやがる。

「俺に話があるなら直接来い。かわいがつてやるぞ、樋無」

この程度で俺を欺けるとは、甘く見られたものだ。あのバカのこどだから、これもお見通しなのかもしれんが、まあいい。

次は、ウサギのイラストが描かれた自己主張が激しいものを手に取る。

「とりあえず死ね、バカウサギ」

あいつはこれでいいや。

それだけいうち、カメラと盗聴器をまとめて破壊する。あとで燃えないゴミの日を確認しなければ。

次は分解されたアサルトライフルの組み立てを始める。それを手際よくこなすと、次は拳銃だ。これも一度分解、その後に清掃をして組み立てた。

「うん、こんなもんだろ」

この作業を始めてもう十年近い。いい加減になれたものだ。  
がちや。ヒドアノブが回る音がした。

「俺だ、一夏だ！」

「なんだ、おどろかすなよ」

反射的に扉へと拳銃を向けると、そこにいたのは顔を引きつらせた一夏だった。

「おどろいたのは俺だ！」

「ノックをしないのが悪い。それに、俺は武装の整備中だったんだ。  
そんなところにくるほうが悪い」

実は、俺も無用心だったりする。自分の家の感覚で、カギをしないで整備を始めてしまった。あまり見られていいものではないから

な。

物騒な人物だと思われたら、女の子が部屋に来なくなってしまう。  
「それ、どうしたんだよ？ 学校にも持ってきたのか？」  
「まあな。許可は取つていいから心配するな」

「そうか」

部屋にあつた勉強机、その椅子に座ると一息つく一夏。

「それで、どうしたんだよ」

「……簞と部屋が一緒だつたんだ。それで、ちょっととな」

「どうせお前のことだから風呂上りにでも出くわしたんだろう」「なんでわかるんだよ！？」

当たり前だろ、このラッキースケベめ。

「それで、どうだつたんだ？」

「なにが？」

「どれくらい成長してた？ 胸の大きさとか」

「ばつ！？」

一夏が顔を赤くする。どうせ、見た光景を思い返しているのだろう。

「なにいつてんだよ！」

「なにって？ 男としては気になるだろ？ 昔は一緒に風呂なんかも入つたんだ。それがどれだけ成長したか知りたくないのか？」  
「何時の話をしてるんだ！」

確かに、小学一年生くらいかな。あの時は男も女もなかつたからな。  
「服の上から見た感じでは、かなり大きかつただろ。どうだつた？」  
「あ、え、うつ……」

言葉に詰まる一夏。くそ、一人だけの秘密にして夜のネタにでもするつもりか。幼馴染に対し、実にけしからん。俺にもその幸せを分けて欲しい。

「ここか、一夏！」

そこで本人登場。蹴破るような勢いで、木刀を持った簞が入つてきた。

「おい、人の部屋に入る時はノックをしろ。集団生活なんだからマナーくらい守れよ」

「一夏、見つけたぞ！」

俺の言葉も許可も聞かず、勝手に部屋に入る幼馴染。

なんだろうな。六年振りに再会したかわいい女の幼馴染が部屋をたずねてきたというのに、まったく嬉しくない。

「ま、待て箒。俺が悪かった、謝る。だから許してくれ

「問答無用」

「じゃねえだら、バカ」

箒が振り下ろす木刀。それを片手で受け止めるといつも片方の手で箒の頭に手刀を入れる。

「落ち着け。照れ隠しだか怒つてるのか知らんが、仮にも剣士ならくだらない理由で剣振るうんじゃねえよ」

「し、しかし……」

「いい訳はいらない。少し反省しろ」

「……すまん、美鶴。感情的になりすぎたようだ」

「しゅん、とうなだれる箒。つたく、落ち込むなら最初からやるなよ。」

「で、理由はなんだ？ 風呂上がりの半裸姿を見たところまでは聞いたぞ。俺にも見せる。そしてそのけしからん胸を揉ませてくれ」「だれが揉ませるか！ そのことはいい。あれは事故だ。だがな……」

ふむふむ、一夏が竹刀に引っかかった箒のブラを見たと。その理由も偶然っぽいけどな。箒にも落ち度はあつたっぽいし。それで思わず木刀を振つたら一夏に避けられた。それでまた振つたら一夏がまた避けたから意地になつてこうなつたと。

まあ、そりや避けるだろ。当たつたら痛いし。攻撃には反射的に避けるように仕込んだし。怒りで単純になつた箒の太刀じやかすりもしないだろ。

結論、

「ぐだらない」と喧嘩するな。とつあえず、お互に謝つとけ」

「そうだな。ごめん、第」

「私も、すまなかつた。一夏」

「こういつ時、いつも仲裁するのは俺の役目だつた。それが、今になつても同じ役とはな。いい加減、昔のまんまで嬉しくなるぜ。」

「なに笑つてるんだ?」

「いや、何時までたつてもガキだなつて思つたんだよ」

「失礼なヤツだな。お前こそ、そうやつて大人ぶるのは昔からだ。それに、昼間のオルコットとのアレもそうだ。強い女を求めるのも、昔から少しも変わってない」

それはしようがない。俺個人の好みの問題なのだ。強い女性と戦い、身を削り、互いを求め、その果てに愛し合ひ。いや、ずいぶん歪んだ恋愛感だな。

「まつ、それを含めて互いに積もある話もあるだらう。飯でも食べながら、昔話でもしようぜ」

「いいな、久しづびりの再会なんだ」

「ああ、そうだな」

それから俺たちは食堂で夕食を食べながら、思い出話や今までのこと、そしてこれからのことと思つ存分話した。とても、充実した時間だつたと思う。

そんなこんなで日も変わる頃。話は夕食後も続き、すっかり夜も深ってしまった。いい加減寝なくては明日に響く。のだが、

「いらっしゃい、待つてたぜ」

深夜の来訪者。普段なら迷惑だと追い出すのだが、こいつは別だ。

「狭い部屋だけど、座れよ。千冬」

俺は織斑先生とは呼ばず、名前で呼んだ。それに、今回は怒ることもなく、

「それは、この部屋を用意した学園の教師である私への嫌味か、美鶴」

それは、プライベートの織原千冬だった。さすがに黒のスース姿ではなく白のジャージを来てはいるが、それがまた嫌にかっこいい。美人は何を着ても似合うね。

「冗談だ。で、話はなんだ？」

「話があるのはそっちだろ。この数ヶ月はドタバタで会えなかつたんだ。なにか、いいたい事があるんじゃないかな？」

「そのドタバタの原因の一人がなにいつてるんだ」と呆れたように笑う。俺も同じく、笑つた。

「酒はないが、コーラならあるぞ」

「もらおうか」

俺はグラスを一つ出すとコーラを注ぎ、一つを千冬に差し出す。一人で並び、ベッドに腰掛ける。

「そうだな、なにから話そうか。まずは、礼をいわせてくれ。一夏を預かってくれて、ありがとう」

それは、俺たちがIISに乗れることがわかつてからの数ヶ月、一夏が俺の家に住んでいたことをいつてはいるのだろう。

「別に、いいさ。今までよく泊まつてたんだ。改めて礼をいわれるほどの事でもないだろ」

「それでも、さ。もし一夏が一人で家にいたら、なにがあるかわらなかつた。それを守つてくれたのは美鶴と玲子さんだ。本当にありがとうございました」「うう」

確かに、一人で家にいたら記者や国の役員や研究者などのせいであ落ち着く暇もないだろ。

「しかし、本当にブランコだよな。一夏の心配ばっかで、俺はどうでもよかつたのか」

「そ、そういうわけじゃない！ もちろん心配はした。だが、美鶴の強さはよくわかつてゐるからで、一夏はまだ弱いからだな……」

俺の意地悪な言葉に、慌てて弁解する千冬。その姿は、昼間のき

りつとした雰囲気など少しもない。

その姿がかわいいので、俺は千冬の口を、自分の口で塞いだ。

「……」

「……」

互いに、しばしの沈黙。そして、口を離すと拗ねたように、「不意打ちとは卑怯だぞ」

「千冬がかわいいからいけないんだろ。まつ、気にするな。千冬の弱さはわかってるからさ」

世間では最強などと呼ばれている千冬も、常に強いわけじゃない。弱さも、もちろんある。その一つが、一夏だ。一夏のこととなると過保護になるのは、それだけ大事に思つてるからだ。俺のことを想つてくれてるのもわかるが、やはり妬けてしまつのはしょうがない。少しの意地悪くらい許してもらおう。

「コホン」

顔を赤くした千冬が一息、気を取り直して話を再開する。

「それで、だ。美鶴、なぜ自分と一夏だけが男でありながらISに乗れるか、検討はつくか？」

「まあな。確証はないが、多分バカウサギのせいだろう」

「やはり、束か」

篠ノ乃束。ISの製作員で天才中の大天災。世界を自分と、大切な人物数人と、それ以外でしか考えられない異常者でもある。あと、俺の天敵。

その大切な数人の中になんといふことだらう、俺と一夏も含まれているらしい。それが、理由だらう。大体、ISのコアを書き換えられるなんて束しかいだらう。

「なに考えてるんだ、束は」

「ただの暇つぶしの可能性もあるな。なんせ、部屋にカメラと盗聴器まで仕込んであつたんだから」

「なに？」

「安心しろ。全部壊してある」

千冬のかわいい姿を束になんて見せてやるか。俺が独り占めするのだ。

ちなみに、一夏にはさつき妨害電波を出す装置を渡しておいた。 篓はなんだかわかつてないみたいだが、一夏はとりあえずわかつただろう。まあ、盗聴と監視される理由はわかつてないだろうけど。 体だけじゃなくて、頭も鍛えるべきだったかもしない。

「そうか。あとは、少し文句がある」

「文句？」

「オルコットのことだ。ずいぶん、仲がよさそうだったが」

「ああ、お嬢様のことか。ふふん、妬きもちか。

「気になる？」

「別に、お前の浮氣癖はわかつてるし、私への気持ちも理解している。オルコットが、美鶴の好みかもしれないといふこともわかつた。 だが、それでも、あまり気分のいいものでは、ないな」

少し悲しそうに笑う千冬。弱い千冬だ。

ああ、ダメだ。そんな顔するなよ、千冬。そんな顔見せられたら、 我慢できないじゃないか

「え？」

俺は千冬を抱き寄せるとい、そのままベッドに押し倒した。

「な、なにするんだっ？」

「なについて、男と女がすることなんて一つしかないだらう。それに、 ここしばらく千冬と会えなかつたから溜まつてるんだよ。千冬だつてそつだろ」

「しかし、今の私と美鶴は教師と生徒で……」

といい訳をする千冬の口を、また自分の口で塞ぐ。先ほどよりも 長く、深く、攻めるように口付けを交わす。

「さて、嫌とはいわせないぞ。いふんだつたら、そのたびに口を塞ぐことになる」

「……やっぱり、卑怯だ」

「何とでも。それで、どうする？」

千冬は恥ずかしそうに顔を赤くし、悔しそうに顔を背けると、首を小さく縦に振った。

そして、高校生活一 日田は過ぎていった。

## 変わらない者たち（後書き）

これってR-15にしたほうがいいのでしょうか？  
誤字脱字あれば報告お願いします

## それぞれの戦い（前書き）

なんだか、このままこくと鈴だけあんまり変りなうことにならぬ  
です  
かじりつけ

## それぞれの戦い

「寮つていいな。準備しなくても食事が出てくるんだから」

「そうだな」

高校生活一日目。

俺と一夏。筈は朝食を食べに食堂へと来ていた。世界中から生徒が通っているだけあり、メニューも国際色豊かなこの学校。俺はとりあえず、洋食セットを頼むことにした。

「いいよな、このスクランブルエッグ。ふわふわのところどころだ」

「こっちの米も食つてみろよ。かまどで炊いたみたいだぜ」

一人して、楽して食事にありつける幸せをかみ締める。

「そんなに嬉しいのか？」

「まあな。朝の時間は数分でもすごい貴重だ。仕事が少ないほどありがたい」

一夏はは半分一人暮らしみたいなものだし、家事は必然的に自分で行うことになる。俺は、味覚音痴の母親の影響で食事だけは家族のものを用意している。

「織斑くん、隣いいかな？」

数名の女性とが、盆を持って声をかけてきた。

「もちろん、隣にどうぞ」

一夏ではなく俺が答える。

「やつた、ありがとう」

「いえいえ、俺のは女性からのお願いは断らないんで」

「……出たよ、美鶴の八方美人」

呆れたように俺を見る一夏と筈。

失礼なヤツだ。第一、一夏にだけはいわれたくないな。

「あれ、師河くんと織斑くんって知り合いなの」

「まあな。筈もそうだけど、幼馴染なんだ」

女性の楽しく談笑を始める俺と一夏。それに比例して、筈が不機

嫌になつていいく。

わかりやすい。そしてヘタレだな、篠。もつと積極的にいかないと一夏はわからないぞ。

「へえ、師河くんつて昔からこんな感じなんだ」

「そりなんだ、ショッちゅうナンパに付き合わされてや。いつまつたもんじやないよ」

「ナンパとは失礼な。ただ町に出かけて、美しい女性がいたら声をかけてるだけだろ」

と、俺たちは話す。だが、

「でもや、師河くんつて本当はあんまり本気じやないよね?」「なにが?」

「女の子へのアプローチ」

……へえ、なかなか鋭いこというな。少し話しただけでそのことがわかるとは、おもしろい子だ。

「なにいつてるのよ、今時珍しいくらいの肉食系じやない」「そりかな~」

「そりだよ、ねえ?」

さて、どう返事をしようか。

「そりだね。それは、自分で確かめてみたらどうかな」

俺は席を立つと、先ほどの言葉を発した女性とに近寄り顔を寄せる。

きぐるみのようなパジャマを着た女子だ。

「名前、聞いてもいいかな」

「布仏本音だよ」

ああ、なるほど。布仏の人間か。盗聴器壊した腹いせか何か知らないが、やつてくれるな、樋無。

「ここまで食べている! 食事は迅速に効率よく取れ! 遅刻したらグラウンド十週させるぞ!」

食堂に千冬の声が響く。時間切れのようだ。

「残念、今回はここまで。また、次の機会にしよう

俺は顔を離すと、顔を赤くしている一夏たちを無視して席に戻ると食事を再開する。

グラウンド十週は嫌だからな。

授業は相変わらず退屈だった。なにせ、兵器や武器についての知識を学ぶことは俺のライフワークのようなもので、特に最強の兵器であるエリについてなど、俺に教えられるものは千冬と同程度あると自負している。なので、授業中はもっぱら山田先生の胸を見ることに従事している。うん、大きいな。

それに比べて一夏はグロッキー状態。あの分では、新しくもらった参考書もほとんど読んでないのだろう。

そんなこんなで休み時間。地獄のような苦痛から開放される貴重な時間だ。

一夏の席に向かうと、昨日のよつに机に座る。

「お疲れ」

「……ああ」

返事が小さい。死にかけのよつだ。

「美鶴、さつきの授業、山田先生は何語を話してたんだ?」

「主に日本語。専門用語は英語も混じってるな」

「そうか……」

そして、机に突っ伏す一夏。

そんな一夏を気にすることもなく、今日も今日とて女子が俺たちの周りに集まつてくる。

マシンガンのように吐き出される質問に、困惑顔の一夏。俺は適当に、答えていく。

「ねえ、千冬お姉さまって血を止めどんな感じなのー?」

「え。案外だらしな……」

「バーン!」

「休み時間は終わりだ。散れ」

一夏の言葉は、千冬によつて止められた。

都合の悪いことは口封じか。やれやれ、大人つて汚いな。

「何かいいた気だな」

「なにもありませんよ、織斑センセ」

別に、ベッドの上での千冬の姿をバラそなうなんて考えてませんよ。十八禁な上に、人に教えるにはもつたいない。

「まあいい。ところで織斑、お前のISの準備だが時間がかかる」「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

「????」

意味がわかつてない一夏。これくらいわかつてくれよ。

しかし、専用機か。国も大きく出たな。世界で一人しかいない男性操縦者を手元に置いておきたいってことか。

千冬に教科書の音読を命じられた一夏は、やつと状況が飲み込めたようだ。

バカウサギの氣まぐれのせいで、現在ISコアは467しかない。一つの国が保有する数は、あたりまえだがそれよりもさらに少數だ。その貴重な一つを、一夏のために使おうというのだ。

「あの、先生。篠ノ之さんつて、もしかして篠ノ之博士の関係者なんですか」

話の中にバカウサギのことがあつたせいか、聰い生徒が聞いてきた。まあ、珍しい苗字だしいずれはバレると思つてはいたが、早かつたな。

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ。

あつさりバラす千冬。それに、教室が沸き立つ。クラスに有名人の身内が一人もいたのだ。無理もない。しかし、

「あの人は関係ない！！」

篝は大声を上げた。バカウサギの話は、篝にとつて地雷みたいなものだからな。

「……大声を出してもいい。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

さてさて、空気が悪くなつたな。しょうがない、助け舟でも出すか。

「織斑センセ。俺には専用機ないの？」

「ない。IS一つ作るのにどれだけの資金と時間が必要だと思つてゐる。コアも、そういうつも都合できるものじゃない。故に、今は先着順で織斑のISだけが作られることになつた。試合の日には学園の訓練機を準備してやる。安心しろ」

世間的には、一人目が一夏。一人目が俺ということになつてゐるからだな。しかし、本音は別のところにある気がする。もつと政治的な、軍とか他国とかが絡むよつな……。有名人を身内に持つと大変だということだな。

「お互いがんばろうぜ、一夏」

「突然なんだよ？」

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」

俺は訳がわからぬといふ顔の一夏を無視して席に戻る。しかし、一夏に専用機か。俺の対戦相手はお嬢様だと思っていたが、思ったより楽しめるかもな。

「安心しましたわ」

「何が？」

「昼休み。俺はお嬢様に誘われて屋上で昼食を取つていた。

ちなみに一人だけ。一夏は笄と食堂に行つた。一人だけにしてやつたのだ。少しばがんばれよ、笄。

「織斑さんの専用機のことです。さすがに訓練機に乗つた素人では勝負になりませんもの」

一見、相手を見下したような発言だが、すべて事実だ。代表候補

生であるお嬢様は専用機持ちで、ISの操縦時間も数百時間になつてゐるだろう。

それに対して、一夏は入学試験の時わずかにISを操縦しただけだ。まぐれで山田先生に勝つたようだが、そんなもの考慮するには値しない。どんな兵器でも、十全に扱うにはそれ相応の時間が必要なのだ。

「ま、そうだな。俺もそのほうが少しは楽しめり

「安心してください。私が織斑さんを下し、美鶴さんを心より満足させて見せますわ。それこそ、織斑先生以上に」

あれ、千冬の話がここで出てくるのか？

「わたくしも女です。想い人の心が、どなたを向いているかくらいわかりますわ。もちろん、だからといって諦めたりしませんけど」

「まさかお嬢様からそのような言葉が聞けるとは、光榮です」

かわいく笑うお嬢様に、俺は軽く答える。やれやれ、たくましくなつたものだ。

「それで、美鶴さんはどうしますの？ 訓練機を借りるおつもりですか？」

「いや、借りない。訓練機でも専用機でも、いきなり乗つた俺がお嬢様に勝てるとは思えない」

ISに圧倒的な能力があるか、お嬢様に油断があるかしないと勝利は難しいだろう。打鉄に乗つた俺がお嬢様に挑んでも、勝率はかなり低い。せめてもう少し訓練ができれば、ものにはなるのだろうが。これもまた、覆らない事実だ。

実際、試験の日に対戦した千冬とは五分しか持たなかつた。ISに乗つた千冬が化け物なのはわかっているが、五分しか戦えなかつたのは無念だ。

「くそ、生身同士なら負けないのにな。

「じゃあ、どうしますの？」

策はある。対抗手段も考へてはある。しかしそれは、詰まるところ、

「ただ、いつもの俺の戦いをするだけさ」

「それだけの話だ。

「そうですか。それは、私も全力でいかなければなりませんわ」  
そう笑うお嬢様は、楽しそうだった。とても楽しそうな、戦士の顔だった。

「さて、物騒な話は終わりだ。食事にしようぜ」

「そうですね。わたくし、お弁当を作つて参りましたの」  
そういうて、お嬢様は一人分のランチボックスを取り出した。

「準備がいいね」

「当然です。これも、美鶴さんをわたくしに惚れさせる戦いの一つですから」

自信満々にランチボックスの蓋を開けると、そこには色鮮やかなサンドイッチが詰まっていた。

「うまそうだな。いただくよ」

一つ取つて口に入れる。さて、そのお味は。

「……」

「どうでしょ?」

期待に満ちた眼差しのセシリ亞。

「……これ、味見したか?」

「いえ、してませんけど」

それがなにか、とお嬢様はいった。

なにか、じゃねよ。お嬢様のサンドイッチの味。それはすさまじかつた。

甘いようなすっぱいようなしづぱいような。まるでお袋の作った料理のようだ。見た目がよかつただけに、なお悪い。

「試しに食べてみろ」

俺の食べかけも、お嬢様の口に入れる。最初こそ、間接キスだと気づいたのか顔を赤くしていたが、すぐに青ざめてくる。

「感想は」

「……これも、わたくしが乗り越えるべき戦いですわ」

「勝てるのを期待してるよ

と、むつーつサンンドイッチを口に入れる。やはり、すさまじい味だ。

「美鶴さん、無理はしなくていいですわ

「これ食わないと、俺は午後の授業を空腹で過ぐすことになるんだよ。この程度ならお袋の料理でなれてる」

それに、女が俺のために飯を作ってきたんだ。それを残すわけにはいかないだろう。

「……ありがとうございます。大好きですわ、美鶴さん」

お嬢様はそう、優しく微笑んだ。

不覚にも、かわいいと思ったのは黙つておこう。

それぞれの戦い（後書き）

とつあえず一巻完結を田指します

## 戦の意味（前書き）

鈴は一夏と美鶴のどちらのヒロインにしようか迷って中。どちらでもいいんだけど、バランス的に一夏かな?

## 戦う意味

「やつほー、お元気? 美鶴だけじ、今大丈夫?」

『……今から寝るところだつたんだけじ』

電話の向こうから聞こえてきたのは、かわいらしい女の子の声。その声には、そこはかとなくダルさが感じられた。

「あれ? 時差を考えてもまだ昼間だろ?」

『徹夜で作業してたんだよ。こっちも社運がかかつてきて、今は忙しいんだ。会社はどうでもいいけど、潰れると工場の整備なんかが大変なんだよ』

「そうか、それは大変だな。で、お願ひがあるんだけど」

『僕の話聞いてた? 今すこしい忙しいんだけど』

「そうか、がんばれ。でだ、ちょっと準備してもらいたいものがあるんだけど」

『僕の話、まったく聞いてないんだね』

「聞いて欲しいのか? ベッドの上でならいつでも聞くべぞ」

『じゃあ、対価はそれでいいよ。僕も近々日本に行くことになるから、その時は優しくしてね』

「ああ、存分にな」

必要な物のリストはメールで送る、と伝え電話を切った。

「とうわけで、女の子と寝ることになった。もちろん、エロい意味でな」

「なんでだよ!」

夕飯時の食堂。俺にとつては亘以来の食事だが、どれほど待ち望んだことか、まともな食事を。ああ、白米がうまい。味噌汁のダシがきいている。ビバ、日本食。

「お、お前は! 何か必要なものがあるからと電話したのではないのか!」

「そうだよ。楽しい食事の前に、やるー」とまやつておきたかったか

らな

「それがなぜ、セツ……つ！」

「セツ？ ああ、セツクスか。おい、食事中だぞ。せつかく俺が表現を和らげてやったところ。もう少しTOPをわきまえろよ、  
篇」

顔を真っ赤にする篇に、俺は呆れた。いつにいつマナーにならぬといヤツだと思ったが。一夏と再会したせいでおかしくなってきたのか？

「う、うるさい！」

「それより俺としては恋人がいるのに、そう軽々と他の女生と関係持つのはどうかと思うんだが。弟としては怒るところだぞ、これ」千冬が彼女か、どうも違和感がある。千冬との関係はそう簡単にいい切れるものではないからな。運命以上宿命以下みたいな。

「あいわからずシステムだな。心配するな、俺の千冬への愛は揺らぐことはない」

「まあ、やうだらうな」

一夏は苦笑しながら、お茶をすする。なんだかんだで、一夏は俺と千冬のことを理解してくれてるからな。自分でも歪んでるとは思うからこそ、こういう理解者はありがたい。

「一、コホン。それでだな、いつたいどこに電話してたのだ？」

「氣を取り直し、改めて篇がたずねてくる。まだ顔が赤いぞ。

「我が家御用達の武器会社。まあ、正確にはその支社みたいなものだけど。で、そこには彼女がいるからさ。月曜のために武器を都合してもらおうと思つて」

「武器つて、IIS用の」

「まあな

へえ、と一夏と篇は返事をした。まあ多分、本当の意味をわかつてないな。

「しかし、お前はどれだけ女と関係を持つてるんだ。男として、一人の女性を一途に思つべきではないか」

「世界の歴史遡れば、側室がいた偉人なんていくらでもいるだろう。それに、俺だつて誰でもいいわけじゃない。ある程度の線引きはしてるさ」

これは本当。今まで俺が望んで関係を持ったのは一人。ビジネス上の都合で一人。半ば襲われる形で一人だけだ。

「それより、そつちはどうなんだ。勝算はあるのか？」

「ああ、筈にISについて色々教えてもらおうと思ったんだけどさ」

「一週間程度の付け焼刃では無理だ。なので、剣一本に絞る」つまり、だ。物覚えの悪い一夏ではISの知識を少し覚えただけでは何の役にも立たない。なので剣を交え一夏もモチベーションを高め、できあがつたところをお嬢様にぶつけるというわけだ。

しかし、さすが姉弟。昔、千冬がしていた調整方法と同じだ。ISの大きな試合の前は俺が相手になつたものだ。昼は剣と銃弾を交わし、夜はベッドで互いをむさぼり合う。そして死んだように眠り、また戦う。いやはや、充実した日々だったな。

「まあ、悪くないな」

一夏は頭ではなく体で覚えるタイプだ。せめて、お嬢様の機体データや戦闘データがあれば何とかなるのだろうが、新学期始まって早々では満足にあるとも思えない。しかも、お嬢様だつて日々成長しているだろう。なら、そんなデータなどに頼つてない知恵絞るよりは、自分を高めることに集中したほうがいい。

「で、どうだつた？ 手合させした感想は？」

筈は全国大会で優勝する程度の実力だつたな。それだと、一夏の方が幾分か上だと思うが。

「最初は俺が優勢だつたんだけどさ」

「最後のほうは私も何本かとつたぞ。相手をしている私が不甲斐ないと、一夏の訓練にならないからな」

俺の予想が外れたな。昨日の一件、筈は一夏が絡むと周りが見えなくなるところからなにか問題を起こすと思ったが、それでもなかつたか。

「なんなら、明日から見学に来るか？」

「いや、お楽しみは取つておくよ」

それに、俺もやることがあるからな。

考えるのは、六年ぶりに再会した幼馴染一人のこと。

一人は、織斑一夏。私が、その、こ、恋をしている少年だ。出会いは小学一年生の時。それからずっと、恋をしてきた。その想いは離れていても色褪せることはなく、再会してからはさらに強くなつたほどだ。

強く、かつこいい。そんな、大好きな少年だ。

もう一人は、師河美鶴。美鶴との出会いは、一夏よりもかなり後。その出会いは最悪で、最初は彼に対して嫌悪と恐怖しか持つていなかつた。しかしそれも、最初だけ。同学年ではあるが、それは中学で一年留年したためらしく、本来は私と一夏よりも一つ年上の彼。美鶴は、難がある性格をしているが、厳しくも優しくもあり、それでも私たちにとつては兄のような存在になつた。

それは、六年がたつた今でも変わつていない。

高校生活初日に、私が感情に任せて振るつた木刀を受け止めた彼がいつた言葉。それは、私に対して確かな変化をもたらした。

それを感じたのが、今日の一夏との訓練だ。

恥ずかしながら、その時、私は浮かれていた。一夏と同じ時間を過ごせることに、一夏が私を頼つてくれていることに浮かれていた。そんな私を、一夏はあっさりと負かした。仮にも、剣道で全国大会で優勝をした私が、あっさりと負けたのだ。

一夏は美鶴に手解きを受けていたといつていたが、それでも、私は簡単に負けすぎた。

最初は、その事実が受け入れられなかつた、だが、数度も剣を合

わせる内にすぐわかつた。

一夏は、私のことしか見ていない。ただまっすぐに、相手である私がだけを見て、精神を研ぎ澄まし、剣を振るつてきた。

まるで、愛しい相手だけを求めるように、剣を振るつてきたのだ。それはかつて見た、ただ互いを求めて戦う美鶴や千冬さんたちのようだつた。まさしく、戦う者の姿だつた。

その一夏の姿勢が嬉しく、また恥ずかしくもあつた。一夏は純粹に私を求めてくれているのに、私はなんて汚れているのだろう。怒りに任せ剣を振り、その場をごまかす為に剣を振り、浮かれた気持ちで剣を振るう。昨日、剣が一夏にかすりもしなかつたのも、今日もまた勝てないのも当然だ。

私が同じ場所で立ち止まつて、想い人はずいぶんと先に行つてしまつたようだ。

とても情けなかつた。ひたすらに情けなかつた。私を頼つてくれた一夏に、こんな醜態を晒すのが情けなかつた。成長していない私が情けなかつた。なによりも、弱い私が情けなかつた。

汚れていて、情けなくて、醜悪で、弱い。だからこそ、私はこうも思つた。

強くなりたい。

一夏のよう、セシリ亞のよう、千冬さんのよう、美鶴のよう、に、強くなりたい。

そう想つた瞬間、今まであつた心の靄がなくなつた気がした。別に、一夏に対する思いや、複雑な嫉妬がなくなつたわけではない。

それでも、剣を持ち一夏に対峙して、いる間だけは、そんな不純な気持ちなどは一切ない。ただ目の前の一夏だけを、剣を振るう相手だけを見ていた。

その後は、やはり私が終始不利ではあつたものの、何本か一夏から取れるようになった。

互いに剣を振り、技を競い、ひたすらに戦つた時間は、この数年間味わつたことがないほど充実していた。

だから、私は思つ。今から、始めよつ。篠ノ之箒の戦いを。一夏への想いも、剣の腕も、IISの操縦も、姉さんとの関係も、すべて戦い乗り越えよう。

私の自慢の、一人の幼馴染に負けない。いや、勝てるよつに戦おう。

「頼もう

授業も終わりそつそう、一夏と箒は訓練のため剣道場へと向かつた。箒がやけにやる気だつたのが印象的だ。それも空回つている感じではなく、とても充実しているような氣だ。昨日もそうだつたが、心境の変化でもあつたのだろうか？

お嬢様もそつそう教室を後にした。昼休みに強烈な味のおにぎりを食べながら聞いた話では、アリーナを借りて鍛錬をしているらしい。

そして俺だが、対戦相手の二人が鍛錬をしているというのに、一人のんびり胡坐をかいているほど俺は慢心などしない。むしろ、今回戦いは専用機を持たない俺が一番不利とさえ思つてゐるほどだ。なので俺も鍛錬をしようと思うのだが、相手がいない。一人でしようとも考えたが、ここ最近は戦闘をしていないので、どうせなら一夏たちのように対人でやり勘を戻したい。だが、俺と互角で戦えるものなど早々いるものではない。一番の理想は千冬なのだが、さすがに教師の仕事があるとのことで断られた。そうなると、次善の手はこの学園最強の生徒となるわけだ。

「やあ、美鶴くん。生徒会になにか御用かな？ 懶める生徒の相談なら、どんなことでも聞くよ」

そう扇子を広げいやらしい笑みを浮かべるのは、更識楯無。この学園の生徒会長で、IIS学園最強の肩書きを持つ女。ついでに、俺

とは旧知の仲。

「そりゃ。じゃあ文句でも一つ。部屋にプライベートを無視して盗聴器や監視カメラを仕掛けるバカがいるんだがどう思う?」

「そんな迷惑なヤツがいるのかい。それは忌々しき事態だ。そう思ふだろ、虚?」

「そうですね、お嬢様」

楯無の言葉に、苦笑しながら答える眼鏡で三つ編みの女生徒。

「はつ、どこで会つてもかわらないな。同じクラスの本音、あれは虚の妹だな」

「そりゃ。私からの入学祝と挨拶は気に入つてくれたかな?」

「ああ、嬉しくて涙が出そうだ。だから、今日はそのお返しに来たぜ」

俺と楯無は、共に笑顔を浮かべる。少なくとも俺は、友好的に笑つてゐるつもりはない。

「それはありがとう。といひで、小耳に挟んだんだが、来週の月曜にクラス代表を決める決闘を行つそうだね」

「さすが、学園内でのことは何でも知つてるな。更識の名は伊達じやないつてか」

「師河の御子息に褒められるとは、私も鼻が高いよ。それで、今日の用事はそれが関係してるとと思うんだが、違つかい?」

「俺はただの不良息子だよ。それより、いつちよバトルうぜ」

まったく。俺は両親ほど立派な人間じゃないよ。それどころか、いつも心配ばかりさせていいる不出来な子供さ。それよりも、本題と行こうじゃないか。

「やっぱりそれか。どうせ、そんなところだろつと思つたよ。私を調整相手に選ぶなんて、まったく、君くらいのものさ」

「断るつてのか? 校内ではいつでも襲つて來いとかふれ回つてゐるのに、俺はダメなのかよ。それとも、女尊男卑の今は男なんかに構つてやれないとかいうのか」

「まさか、私は生徒会長だ。学園の生徒を差別なんかしないさ。そ

れに、美鶴くんに襲われるなら、それもまた悪くない

「そうか、よつ」

俺は袖に隠していたナイフを取り出すと、楯無に投擲した。それが、開戦の合図だった。

「まったく、美鶴くんはせつかちだな」

それをいつの間にか手に持っていた鉄扇でな難なく弾くと、俺の意識の隙間を縫うように接近する。

「だけど、嫌いじゃない」

振るわれる鉄扇。それを今度は腰から引き抜いたリボルバー型拳銃で払うと、もう片方の手で拳を繰り出す。それを半身で避けた楯無は俺から距離を取った。

「まったく、物騒なものを出したね。それは人に向けて撃つものじゃないな。当たれば人間は即死だよ?」

「訓練弾だから心配ない、当たっても骨が碎ける程度だ。それに、遠慮なく頸動脈狙つてくるヤツにいわれたくないな」

「それは美鶴くんを信じての行動だよ。あれくらいじや、君を倒せない。女性にこれほど信を置かれているんだ、喜びたまえ」

「ああ、まったくだ。その調子で、思う存分かわいがつてやろうつか」「それは楽しみだね。……虚、下がつてなさい」

「はい、お嬢様」

それを皮切りに、俺は引き金を引き、楯無は鉄扇を振るつた。その日の戦いは、日が暮れるまで続けられた。

最後に、この戦いはお互いが本気ではなかつたため決着がつかず、決闘の日まで毎日行われた。そのたびに生徒会室を始め学校中の備品を破壊することになるので、同じく毎日のように反省文を書かされたのは秘密だ。

そして月曜日。待つに待つた決闘の日がやってきた

## 戦の意味（後書き）

次の1話で一夏対セシリ亞  
その次に勝者対美鶴ですね  
筈と樋無はこんなキャラでよかつたか?  
感想、ご意見お待ちしています

## 銃対剣（前書き）

連続投稿行きます

一巻の前半部分が終わる予定です

「やる気は十分つてところか」

「ああ」

月曜の授業が終わり、これから放課後といつ時間帯。俺は一夏と  
雛に声をかける。

「調子は、どんな感じだ？」

「やれることはした。あとは全力でぶつかるだけだ」

「今の一夏なら、代表候補生だつて、美鶴にだつて勝てるさ」

「いや、それは大きく出すすぎだよ」

と、雛にツツコミを入れる一夏。

「そんな弱氣でどうする！ 初めから負けるつもりで戦おうといつ  
のか、一夏は！」

「ああ、そうだな、そうだった。まずはセシリ亞。次は、美鶴だ。  
今日こそ、俺が勝たせてもらひつー！」

「ああ、楽しみだ」

一夏と雛。なかなかいいコンビだな。この一週間の間でずいぶん  
距離が縮まつたようだが。なんだ？ キスくらいはしたのか？  
くそ、失敗した。一夏たちの部屋の盗聴器やカメラ破壊するとき、  
俺用の盗聴器でも仕掛けておくんだった。

それはさておき、

「で、一夏のエスはどんな機体なんだ？」

俺が疑問を口にした瞬間、二人の空気が凍つた。

「どうした？」

「それが、その……」

「まだ、来てないんだ？」

「なにがだよ。

「エスが、来てないんだ」

「はあ！？」

俺は珍しく、マヌケな声を上げてしまった。

決闘前のこの時間帯で、まだＩＳがない？　俺は昨日の内にでも届いて最低限、フォーマットやフィットティング。簡単な動作や武装の確認くらいはしたものと思っていたが。

「……がんばれ」

「がんばれ、じゃねえよ。どうすればいいんだよ、美鶴！」  
「どうすればいいと聞かれてもな。」

「おっと、もう時間だな。俺も準備があるから、先に控え室に行くわ。健闘を祈る」

「う、裏切り者…」

「は、薄情者！」

幼馴染二人が何かいっている気がするが、気のせいだと思おつ。

「来ましたか」

「ああ、遅れて悪かつたな」

俺の控え室のモニターには青いＩＳ、ブルーティアーズに搭乗したお嬢様と白いＩＳに搭乗した一夏が映っている。

どうやら、一夏のＩＳは時間内に間に合つたらしく。名前は、正式か。見た目まんまの名前だな。

「それがあなたのＩＳですか。なるほど、いい機体ですわね」

「セシリ亞のＩＳだつて、まるで騎士のように氣高さを感じるぞ」

「お褒めにあずかり光栄です。さて、こうして対峙しているというのに何時までも話しているだけ、なつてのは味気ないですわね」

「そうだな」

一夏は右手に、刀状の近接ブレードを開く。なるほど、一夏の専用機というだけあって、ぴったりな武装だ。射撃訓練をしていないこともあり、今の一夏には最適な武器だろつ。

「それでは、始めましょう

「それじゃあ、始めよう

最初に動いたのはお嬢様だつた。六十七口径特殊レーザーライフル、スターライトMK?より、鋭い閃光が放たれる。

一夏はそれを回避しようとするが、間に合わず肩の装甲の一部が持つていかれた。今頃、一夏はブラックアウトこそしないにすれ、味わつたことのない気持ち悪さの重力を体感していることだろう。

それにしても、今の銃撃。俺にいわせればまだ荒いところがあるが、それでも速く正確な銃撃だつた。射撃の正確さなら、間違いく一学年トップクラスだ。

それに反応した一夏もさすがといえどさすがだが、如何せん機体がまずい。まだ初期設定のあの機体では、一夏との反応がかみ合っていない。あれでは、避けられるものも避けられないだろう。ただでさえ、遠距離武器への対応は最低限しか教えてないからな。

「今のを避けますか。さすが、美鶴さんに手解きを受けたというだけはありますね。銃撃への反応速度は、賞賛に値します。しかし、それだけにどこか動きがぎこちないようですが……？」

「悪いな。こっちはまだEISに乗つて日が浅いんだよ」

「本当に、それだけでしようか？」

果敢にお嬢様に斬りかかる一夏だが、そのすべてをお嬢様の銃撃が阻む。なるほど、どうも一夏にとってお嬢様は相性最悪の相手のようだ。

「この試合のポイントは、いかに一夏がお嬢様の懷に飛び込むかがポイントだな。

「……まさか、まだ一次移行していいのですか？」

なかなか鋭いな、お嬢様。一夏の動きを僅かに見ただけでそこまでわかるとは。さすが、入学試験主席。教官を実力で倒したのも、頷ける。

「だつたらなんだつてんだ！」

コツを掴んだのか、お嬢様の銃撃を回避しながらも、僅かに接近する一夏。それでも、まだ剣の間合いよりは遙かに遠い。

「なるほど、そういうことでしたか……。しかし、初期状態でそこまでの動きが出来るのですか。さすがは織斑先生の弟、美鶴さんの友。それとも、あなたの才能によるものでしょうか。どれにしても、残念です。もし一次移行していたら、心躍る戦いができるでしょう。それが、とても残念ですわ」

「もう勝った気でいるのかよ」

そりやな、今のところ一方的だし。直撃こそないものの、一夏のシールドエネルギーは確実に削られてる。一夏だつて距離を詰めてないわけではないが、これは一夏のエネルギー切れのほうが先だ。それに、お嬢様はまだ手札を残しているようだし。

「そうやって油断してると、足元掬われるぞ」

「ぜひ、掬つてみてください。そのまゝが、わたくしも楽しめますわ」

「なら、期待にそえてやるよ！」

それから、二十七分が過ぎた。

一夏も徐々に動きはよくなつてきていいとはいえ、それでも白式は中破。シールドエネルギーも残り少ない。

それに対して、お嬢様はほぼダメージなし。それでも油断するところなく、獅子が兎を狩るように確実に一夏を追い詰めていく。

現在、お嬢様と一夏の距離は、およそ二十七メートル。このままでは、一夏の負けで決まりだろう。そこで、一夏が勝負に出た。機体を無理やり加速させると、お嬢様に突撃を始める。

「つ！ 捨て身の特攻ですか。そんなものが通用するほど、わたくしは甘くありませんわ」

ライフルを構え、一夏を打ち落とそうとするお嬢様。だが一夏は、無理やり白式の軌道を変えることで、直撃を避ける。

だが、それは直撃を避けているだけ。銃撃は白式の装甲を破壊しているし、絶対防御こそ発動させないが、シールドエネルギーは僅かしか残っていない。またそのダメージや、機体にかかる空気抵抗や圧力は一夏を苦しめているはずだ。

それでも、一夏は止まらない。お嬢様に向かい、ひたすら突撃する。

結果は、一夏に軍配が上がった。シールドエネルギーが切れる前に、一夏はお嬢様の懷に飛び込み、加速の勢いを乗せた突きを放つ。それはお嬢様の胸を守るシールドエネルギーを貫き、絶対防御を発動させた。肉を切らせて骨を絶つたということだ。

「まだまだ」

一夏の攻撃は止まらない。剣を構え直すと、今度は切り上げるように斬撃を放つ。

その時、俺は思った。

「こりや、一夏の負けだな」

そう、剣を構え直す時に俺は見た。左手を開じてはまた開いているところを。あれが出る時は、大抵簡単なミスをするのだ。きっと、千冬も今頃同じことを考えているだろ？

「わたくしを、なめるな！」

お嬢様が吼えた。それは、およそ普段の姿からは考えられない大声だ。

一瞬で左手に近接武器、インター・セプトを一瞬で展開すると一夏の剣を防ぐ。そこから、流れるような動作で蹴りに繋げ、一夏を弾き飛ばす。そこに追い討ちをかけるように、スカート状のアーマーから弾道ミサイルが放たれた。

爆風が、一夏を飲み込む。この試合を見ている観客のほとんどが、お嬢様の勝利を疑わなかつただろう。

「……つたく、あいつはマンガの主人公かよ」

そして、その結果がわかつていたのは俺と千冬だけだろう。

煙が晴れる。そして、その中からは新たな形を成した白式が現れた。フォーマットとフィッティングが終了したのだ。

しかし、この土壇場で一次移行とは。昔から無作為にフラグを立てては、それに気づかない鈍感振りと、アニメやマンガの主人公みたいなヤツだとは思っていたが。

「けど、どっちにしろ勝ち目は薄いな」

それよりも肝心は、

「あの刀。雪片か」

それはかつて、千冬の専用ISの装備の名前だ。あの刀とワンオフ・アビリティが千冬を世界一に導いた。

それがどうだ。

「ワンオフ・アビイティまで同じか。さすがは姉弟。俺としたことが、妬けるじゃないか」

雪片の刀身が、光に包まれる。間違いない、零落白夜だ。本来なら一次移行しないと使えないはずだが、どうこうわけだか一次移行の段階で使っている。

「さてさて、どういうことだらうな」

一夏は先ほどまでとは比べ物にならない反応速度で、お嬢様の銃撃の雨を掻い潜る。

そして、

「勝者、セシリ亞・オルコット」

勝敗が決した。

「まあ、がんばったんじゃねえの？」

一夏の試合の後、次の試合までの間に、千冬が俺の控え室に来た。敗因は、一夏のエネルギー切れ。それがなくとも、四つのビットが一夏を狙つてからそれで詰みだな。まつ、お嬢様の切り札を出させたんだ。ビギナーズラックとしては上々だろう。

「どうだ、千冬。姉のしては嬉しいんじゃないか

「織斑先生だ」

「二人しかいないんだ。硬いこというなよ」

俺の言葉に、千冬はため息をもらすと、少し恥ずかしそうに、

「まあ、そうだな。少しくらいは、褒めてやるか」

「……千冬つてさ。本当にかわいいな」

「なんだ、急に」

いや、別に。改めてそう思つただけだよ。

「それで、一夏は？」

「ピットに帰つてきた途端、氣絶した。どうも無理な軌道が祟つたらしい。もしかして、骨にひびくらゐは入つてるかも知れん」まあ、その程度で済めばラッキーだろ。下手すれば、骨が折れたかも知れないからな。

「今は、篠ノ之がついている」

「それで、山田先生はお嬢様。千冬は俺の様子を見に来たのか」

「そうだ」

お嬢様の補給と休息が終わり次第、一いつじに連絡が来るようになつてゐる。そうしたら、俺の出番だ。

「それで、本当にいいのか？」

「なにが？」

「それで、試合に臨むのか？」

「違うね。俺は試合をするんじゃない。戦いをするのや」

俺は、一ヤリと笑つた。

すると、千冬は呆れたようになり、また息を吐いた。

「お前は昔から無茶をするヤツだと思つていたが……」

「まつ、現実問題。これが一番勝率が高いと思うぞ」

「私としては、どんな状況でも美鶴がそう簡単に負けるとは思えないが」

「心配してくれるの？」

「ああ。どつかの誰かさんは、恋人が弟の心配だけすると不機嫌になるからな」

そう、千冬は笑つた。こそ、この前の意趣返しかよ。意地が悪いな。

『織斑先生、師河くん。オルコットさんの準備が出来ました。五分後、試合を開始します』

山田先生から通信が入った。いよいよ、というわけだ  
「わかつた。というわけだ、準備はいいな」

「もちろん」

俺は千冬に軽く答えると、軽く体を動かし解すと、アリーナへと向かう。だが、千冬が後ろから抱きしめてきて、動きを止められた。  
「美鶴、最後に一つ。改めていうが、私は、お前のあんな姿を一度と見たくない」

「知ってるよ」

「本当は止めたいたいほどだ。戦うな、HSに乗つてくれ試合をしてくれと。だが。私は止めない。止められない。それをしたら、私は美鶴が好きになつた私でなくなつてしまふからだ。だから、勝つて来い。私以外に負けることは許さない」

千冬が、弱さを見せた。その弱さの原因は俺で、責任も俺にある。それと同じく、強さを見せた。俺を信じるといつ、強とも。そこまでいわれたら、男として答えられないわけにはいかないな。俺は飾らない、いつもの調子で答えた。

「当たり前だ。で、もう一つは？」

「……別に、お前が誰と関係を持とうが構わない。だけど、こんな弱さを見せる私のことを一番に想つってくれるか？」

俺はそれには答えない。その代わり、

「まつ、これが答えかな」

「つー？」

千冬の唇に、俺の唇を重ねる。完璧な不意打ちだ。

「そんじや、行つてくる。続きは今夜つてことで」

「……ああ、楽しみにしていよう」

先ほどまでとは違つ、いつも千冬らしい声で送り出してくれる。そう返されるとは、千冬も逞しくなつたものだ。

しかしその前に、三年間焦らしに焦らせ続けたお嬢様と、思う存分遊ぶ（戦う）としよう。

## 銃対剣（後書き）

一夏がこの時点でセシリ亞に勝てないのは当然ですね  
原作でも負け越してゐるし

一巻で追い詰めたのは主人公補正という解釈です

## 二年目の約束（前書き）

セシリア対美鶴です

この話にはかなりご都合主義が入っています  
そのような展開が嫌いな方は注意してください

## 二年目の約束

人間とは根源的に、強さに憧れを持つ生物だと思います。長い歴史を見ても、人間は戦いと共にありました。戦いと共にその技術を発展させ、戦いに勝つため強さを求めました。

それは時には、各地にある伝承や創作の中でも見ることが出来ます。圧倒的な力を持つ英雄、ヒーローたち。未だに小説なので新たな英雄の物語が作られるのも、その証明だと思います。

そして現実でいえば、I.S. そして、織斑千冬。

I.S.という兵器が作られて以来、多くのものがその強さに、よくも悪くも魅了されました。世界中の各国は、より強い力を手に入れようとしてI.S.の開発に着手し、その結果、世界の技術水準は上昇したでしょう。

そして、織斑千冬。世界最強のI.S.操縦者。現役を引退した今でも彼女に憧れを持つ者は多く、この学園に来る人物の大半は彼女に会うために入学してきます。

それを不純だとは思わない。私もまた同じだ。強さに憧れ、今まで自分を高めきました。

ただし、わたくしが憧れる強さは織斑千冬ではありません。

私が憧れるのは、師河美鶴です。

三年前のある日、彼の戦う姿、強さを見せ付けられ、魅了されました。

その姿は、わたくしの父親を逆連想させました。

私の父親は、情けありませんでした。婿養子ということもあり、母に引け目を感じていたのでしよう。I.S.が発表されて以来、それが謙虚となりました。それに対して、母は強い人でした。女でありながらいくつもの会社を経営し、成功を収めた人です。厳しく、そして、またわたくしが憧れる人物です。

だが彼は父親とは違う、その強さ。それこそが、わたくしの理想

でした。

思い出すのは、彼との最後の会話。

「俺が好き？　なんだ、俺に惚れたのか。まあ、無理もないか。俺つてかつこいいし」

そう、自分に惚れたことを微塵も疑わない。それどころか、それこそが当然だと思っている。強い自惚れ、だが彼がそれをいうと自然と不快感はありません。

なぜなら、それは確かに当然なのだから。彼の強さに、魅せられたい女性などいない。そう、いい切れました。

「まあ、お嬢様は見た目はいいし、なかなか見所があると思うけどな。でも、まだまだ。俺の女になるには、ぜんぜん弱いぜ。そんなじや、名前で呼ぶ気も起きないな」

それは、その通り。その当時のわたくしは、弱かつた。自分で現状を打破する力もないほど弱く、ただの子供だった。

だから、聞きました。どうすれば、わたくしを受け入れてもらえるのかと。

「強くなれ。俺が惚れるほど、強くなれよ」

「強い女性が、好きなのですか？」

「ああ、大好きだね。それで、思う存分戦いたい」

その目からは、わたくしではない、誰か、他の女性を見ている目でした。だけど、今の私には嫉妬する権利すらありません。なぜなら、わたくしは弱いのだから。

だから、わたくしは決めました

「……なら、強くなります。あなたを魅せつけるほどに、強くなりります」

彼がわたくしに惚れるくらい、強くなると。  
「楽しみにしてるぜ」

三年間、その約束を果たすために強さを求めてきました。金の亡者から、両親の莫大な遺産を守るために勉強をしました。その一環で、適正テストでA+が出ました。遺産を守るために、政府に所属し工

Sの国家代表候補生となつたのです。

そこで、ひたすらに強さを求めたのです。さまざま知識を收め、ISの操作技術を学び、女に磨きをかけました。

そして、数ヶ月前。世界初の男性IS操縦者として、彼の名前がニコースに流れたときは驚きました。そして、彼がIS学園に入学すると聞いたときは運命だと思いました。

あの時の約束を果たす。彼に、私の強さを魅せつける。そしてその時が、ついにやつてきたのです。

俺がピットを出ると、すでに上空にはお嬢様が待っていた。

「よう、待たせたか」

「ええ、ほんの少し。ほんの三年ほど、待ちましたわ」

俺は恋人との待ち合わせに遅れた彼氏のように、お嬢様に声をかけた。それに、お嬢様は冗談交じりに答える。

「あまり、女性を待たせるものではありませんわよ」

「女性つてのは、デートの準備に時間がかかるものだと思つていたんだよ」

それは、まるで恋人との会話のようだ。だが、それは決定的に違う。

お嬢様はISに搭乗し、ライフルを油断なく構えている。

「ところで、どうでしようか。わたくしのブルー・ティアーズは?」

「青がお嬢様によく似合つてると思うよ。あと、ISスースツボディラインが浮き出るからエロイよな」

「なんだか、褒められているのかセクハラされているのか微妙ですわね」

失礼な。心からの賛辞だよ。いいね、あの太もも。むしゃぶりつきたい。

「美鶴さんこそ、昔と変りませんわね。もう少し、着飾つたほうが

よろしいのでは？」

「悪いね。元がいいから、あまり服装には頓着しないんだ」

俺の格好は、動き易さと丈夫さを合わせ持つ黒の戦闘服に、防弾耐寒耐熱を追求し多くの収納スペースを持つコート。通信や暗視など多目的機能を持ったゴーグルで、顔の半分は隠れている。そして、1・5メートルほどのライフルを肩で担ぐように持っている。

その姿は、初めてお嬢様の前で戦つたときと同じだ。違うのは、あの時はお嬢様を守るために戦つたが、今度は倒すために戦うということだろう。

『し、師河くん！？ 何してるんですか、早くHSを装着してください！』

ゴーグルから、山田先生の声が聞こえてくる。見れば、観客も騒ぎ立っているようだ。それも、当然か。

俺はHSに、HSに乘らずに挑もうとしているのだから。我ながら、正気を疑うぜ。

「まつ、いつまでも話してゐるのもなんだな。そりそろ、始めるか」

「ええ、そうですわね」

そして、

「さあ、戦おう」

「さあ、戦いましょう」

互いのライフルから、同時に銃撃が放たれる。それと同時に、互いが横へ跳んだ。

瞬間、俺にはレーザーが、お嬢様には実弾が襲い掛かる。

俺はレーザーが地面に着弾した余波を利用し、さらにもう一步地を蹴り跳んだ。ゴーグルの右レンズには、連動しているライフルのスコープから視覚情報が送られてくる。それを下に飛びながら、駆けながらお嬢様へ銃弾を放つた。

「やっぱ、モニタで見るよりも速いな」

レーザーから逃げるよう走り出す。もちろん、反撃するのも忘れない。ヒットアンドアウェイを心がけた戦法。性能差がありすぎ

るISと生身では、回避に専念して少ない機会を掴むしかない。

隙を見つければ、飛翔するISに銃撃を放つ。そのうちの一発が、お嬢様を捕らえた。それはISのシールドを突破し、絶対防御こそ発動させないが、機体の一部を破壊した。通常の銃器ではありえないことだ。

「さすがに、正確な射撃ですね。それに、ISのシールドを貫くなんて。アンチマテリアルライフルかと思いましたが違いますわね」正確には、アンチISライフル。先週、電話で頼んでいたものはこれだ。既存のIS用ライフルを人間が使える大きさにしたのはいいが、反動が大きすぎて常人には使えなくなつたという一品だ。多分この学園で満足に使えるといったら、俺と千冬と山田先生くらいかな。

「なら、わたくしも全力で行きますわ」

お嬢様が、腰部から弾道ミサイルが放たれる。あれ、当たつたら怪我じや済まないよな。

「うんじゃ、逃げますか」

俺はミサイルに背を向けて逃げ出した。といつても、ミサイルは俺をまっすぐに追いかけてくるし、そのスピードは俺より速い。徐々に、俺との距離は狭くなる。そして後少し、あと少しで俺を捕らえるというところで、俺は跳んだ。そして背後を向きながら、ミサイルへと銃弾を一発撃ち込んだ。結果、ミサイルはもう一つのミサイルも巻き込む形で爆発した。

俺は爆風に煽られながらも受身を取り、地面を転がる。熱はコートが防いでくれるが、衝撃はそうではない。確実に、俺の体を痛めつける。

「やばいな……」

だが、俺の顔に浮かぶのは苦痛ではない。笑みだ。獰猛な、獣のような笑み。

すごく楽しい。死ぬか生きるかの瀬戸際で、命をかけて戦う。こんな気分は久しぶりだ。自然と、口に笑みが浮かぶ。

「楽しそうですわね」

「ああ、お互いにな」

見ると、上空ではお嬢様が笑っていた。その顔つきは、貴族のお嬢様の顔などではない。間違いない、戦う者の顔だ。

「では、お次はこれでどうでしょう」

瞬間、俺はその場から離れた。俺の中のなにかが、その場を離れろと叫んだ。急に動いたせいで体に負担がかかるが、そんなことは気にしているられない。

それとほぼ同時、俺の背後、先ほどまで俺がいた場所にレーザーが放たれる。死角からの、ありえない攻撃だ。

「さすがに避けますか」

「おいおい、なんだこれ」

見ると、俺を包囲するように四つのビットが浮かんでいる。それは、先ほどまでお嬢様のIFSについていたはずの部位だ。

「さあ、踊りましょう。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で!」

「ああ、喜んで。お嬢様!」

四つのビットより、レーザーが放たれる。

単純に考えて、今までの四倍の手数だ。一夏には使わなかつた武装。まちがいなく、これがお嬢様の切り札で、全力だ。

降り注ぐ銃撃は、まるで銃雨ともいうべきだろう。せめて死角からだけなど、わかり易い攻撃ならいいのだが、そんあ単純なものではなく、四方あらゆるところから俺を攻めるから、それを避けるのが精一杯だ。せめてレーザーライフルの射撃なら、まだなんとかなる。俺だって、親父ほどではないが、相手の意思を感じ取り攻撃を先読みできなくもない。だが相手がビットではそれも難しい。なにせ、攻撃を命じる者と攻撃が来る場所が別なのだから。からうじて放つ銃弾も、体勢が安定しないせいか僅かにブルー・ティアーズをかするのみ。このままじゃ、いつかレーザーに貫かれるか、俺の体力が尽きる。

「……っ！」

額に痛みが走った。どつも、レーザーの衝撃で地面より小石が飛び、額を切つたらしい。額が切れ、血が流れ落ちる。

戦いで、血を流す怪我をしたのは久しぶりだ。それだけ、お嬢様が強敵だということだろう。

いいな、ますます楽しくなってきたぜ。それこそ、まるでいい女と熱い夜を過ごすように。今にも、イッてしまいそうだ！

「だけど、攻められっぱなしは俺の主義じゃないぜ」

俺はMじゃない。Sなんだよ。

チャンスはある。どうもこのビットを操っている間は、お嬢様はそれに集中するためにライフルで攻撃が出来ないらしい。それが装備上の欠点なのか、お嬢様が未熟なのはわからないが、確かな隙だらう。

そしてもう一つ。どうにも、一夏の時よりも威力がない気がする。最初はライフルではなくビットだからと考えたが、それでもないらしい。おそらく、命中しても最低限死なない程度に調整しているのだろ？。死にはしないなら手はある。

俺は、勝負に出るべく走り出した。襲い来るビットのレーザーは気にしない。一夏だって、これくらいの無茶はしたんだ。俺がしないでじうするんだよ！

「なにを考えているか知りませんが、関係ありませんわ。どんな策だって、わたくしのブルー・ティアーズが撃ち抜きます！」

四つのビットが同時に光る。ビットの向きを確認。それより、レーザーの軌道を予測する。俺はもっとも被害が少ない場所を予測し、レーザーの雨に飛び込んだ。体の数箇所に、熱のよつに痛みが走るが、それだけだ。ダメージにあるが、まだ十分戦える。レーザーが地面に命中し爆風が起きると、俺はさらに加速した。そして向かうは、

「もうつたぜ」

俺はお嬢様の真下にすべり込むように跳ぶと、無理やり体を捻り

真上を向く。お嬢様の形のいいヒップが見えた。

そこで、俺はライフルを放つ。

本来なら死角である場所から放たれたそれは、ハイパーセンサーがあるにしても、お嬢様の反応を遅らせる。

銃弾は機体を捕らえたが、それは足の装甲を僅かに破壊するだけでどどまつた。だが、空中という隙だらけの場所にいる俺へ、次の攻撃はなかつた。

ライフルは使えない。ビットでの攻撃も、今の銃撃で集中力を乱されたためか遅れている。

ならば、ここが使いどころだ。

俺は地面を転がりながら「一トよりボールのような物体を取り出すと、お嬢様へと投げつけた。

お嬢様は反射的にだらう。自分へと向かうそれを、ビットの一つを使い撃ち落した。

素早い反応。そして、体に浸み込んだ対応だ。それを行えるようになるまで、どれほどの研鑽を積んだのだろうか。その努力は、尊いものだ。

だが、今はそれが裏目に出てる。

レーザーがボールを貫いた瞬間、光が弾けた。その強烈な光は会場全体を照らし、観客の視界をもじばらくの間奪つた。

そして、もつとも被害を受けたのはお嬢様だろう。

ISにつまれているハイパーセンサーは、搭乗者の視界を強化する。それは、数百メートル先の、人間の口の動きを捉えるほどだ。だがそれは逆にいえば、見たくないものも見えてしまうということだ。

俺が放ったフラッシュバンは、完璧にお嬢様の不意をついた。そして、ハイパーセンサーの見えすぎる能力もあり、お嬢様の視力を完璧に奪つた。だが、それでは不十分だ。これくらいなら、ISはすぐにお嬢様の視覚を回復させるだろう。

なので、すぐに次の行動に移る。

俺は空になつたライフルのマガジンを変えると、ビットへと銃弾を放つ。本体から離れたビットに、シールドはない。銃弾はやすやすとビットを貫き、破壊した。

ビットより、無作為にレーザーが放たれる。だが、そんな射撃では到底俺は捕らえられない。

俺は乱発されるレーザーを避けながら、確実にビットを落とす。一つ、また一つ。

そして、最後の一つ。その一つがレーザーを放つが、それは俺を狙うでもなく明後日の方へ飛んだ。まだ、視力は回復していない。俺はそれを確認すると、最後のビットをライフルで狙う。

さて、ここでいい訳をしておこう。俺は、別にお嬢様を舐めていたわけではない。むしろ、強敵とさえ思っていたほどだ。ISに乗つているとはいっても、お嬢様は確かに強かつた。だから、俺が勝つたらオルコット、と苗字で呼ぶくらいはしようかなと考えていた。しかし、それこそが油断だつたんだろう。まあ、俺もまだまだ子供。自分の力を過信しすぎたツケというわけだ。

さて、なにがいいたいかというとだな。

俺が避けたはずのレーザー、それが弧を描き、背後より俺を飲み込んだ。

強い。それは最初からわかつていていたことですが、相手にしてみて改めて実感しました。

生身でありながら、わたくしの銃撃を避け。体勢を崩しながらもわたくしに反撃する。その射撃はわたくしのシールドエネルギーを確実に減らします。あんなアクロバティックな動きをしながら、この正確さ。尚且つ、あれほどの威力のライフル、どれほどの反動を持つのかもわからないものを扱つてである。重火器については美鶴

さんに分があるとは思つていましたが、これには舌を巻かざるを得ません。

さりに、的確な判断で、最善の手を打つ。わたくしにはない、多くの戦闘経験からくるものでしよう。

そしてなにより、戦いを楽しんでいます。

IS対人間。明らかに不利で、一歩間違えれば怪我では済まないこの状況で、彼は笑つてゐるのです。

万が一のためにレーザーの出力を下げてこそいますが、それでも地面の形を変える程度の威力はあります。当たればその結果は、いうまでもありません。

にも関わらず、笑つています。それはまさしく、三年前に見た彼の姿。わたくしが憧れた、戦士の顔。

だからこそ、わたくしも笑いました。この心躍る戦いを、思う存分楽しみました。

彼の一手にわたくしが答え、わたくしの手に彼が答える。

この瞬間、この場所にはわたくしと美鶴さんしかいない。観客も誰も、織斑千冬でさえ、わたくしたちの邪魔は出来ない。美鶴さんはわたくしだけを求め、わたくしは美鶴さんだけを求めました。それがとても嬉しく、幸せだった。

わたくしたちは恋人のように、互いを求め合つたのです。

音楽はライフルとブルー・ティアーズの銃撃音。踊るのは、わたくしと美鶴さん。何時までも、この円舞曲を踊つていていい。そう思いました。

ですが、終わりの時が來たのです。

わたくしの視界が白に染まつたかと思つと、瞬間、暗闇に閉ざされました。

すぐに美鶴さんの策に嵌つたと理解したわたくしは、ビットで銃撃を始めました。命中など考えない、視力が回復するまでの時間稼ぎです。

ISの生体機能補助の役割が視力を回復させると、ちょうど美鶴

さんが三つ目のビットを破壊したところでした。

すぐに反撃に出ようと思いましたが、その案を却下します。ここでビットに美鶴さんを攻撃させても、避けられるでしょう。

現状では、わたくしが不利。ですが、まだ最後の札はあります。そして、美鶴さんはまだわたくしの視力が戻ったことに気づいていない。美鶴さんがフラッシュユバンを使ったように、わたくしもここで切ることを決めました。

不安はあります。これはまだ制御が完全ではなく、大事になる可能性さえあります。

ですが、ここで負けるのはお断りです。

織斑さんも美鶴さんも、死地に活路を見出しました。ならば、わたくしもできない道理はない。

四つ目のビットの出力を最大に。これが直撃すれば美鶴さんといえどただでは済まないので、狙うは美鶴さんの足元。衝撃で意識を奪うことを狙います。

大切なのは、イメージ。策が成功するのを想像し、何より、勝利を想像する。

そして、レーザーが放たれました。その攻撃に当然美鶴さんは反応しますが、それは美鶴さんを狙うのではなくまったく別の方向へ飛んで行きました。

そこで美鶴さんは、ビットヘライフルを向けます。

だけど、それこそがこの攻撃の意図。レーザーは、いや、銃弾は直進するものという常識の裏をつく不意の一撃。

レーザーは弧を描くように旋回しました。

BT偏向制御射撃、フレキシブル。これが、わたくしの本当の切り札です。

わたくしの狙い道理、それは美鶴さんの背後より迫り、美鶴さんを飲み込みました。

今までにない、破壊音。美鶴さんは爆風で起きた埃と煙で姿が隠れてしまいます。

ビットを最大稼動しての射撃です。もちろん威力も、今まで最大。

『し、師河くん！？ 医療班、すぐに師河くんの救助に向かってください！』

山田先生の声が聞こえる。わたくしたちが通信を無視するから、スピーカーに切り替えたのでしょう。

だが、わたくしはまだ油断はしません。確かに、わたくしの策は成功しました。

しかし、あつけなで過ぎる。美鶴さんがここで終わるはずがないと、わたくしには確信がありました。

そこで、

「つー？」

全身に、悪寒が走ります。今までにない感覚。……いえ、これは覚えがあります。三年前も感じた、感覚。

その名前は、畏れです。強者が放つ、絶対的な気配です。それは地上、美鶴さんが立っていた場所から感じられました。そしてそこから、

血のように紅い眼が、わたくしを見つめていたのです。

## 二年目の約束（後書き）

この一次創作で書きたかった話の一つ。人間対ISがテーマです  
もちろん、ご都合主義のとんでも展開のチート主人公です  
くり返しますが、ここまで読んで不快な方は引き返してください  
受け入れてくれる方は、続きをどうぞ

## 決着。そして……

「し、師河くん！？ 医療班、すぐに師河くんの救助に向かってくれださい！」

山田先生が、血相を変えてマイクに叫ぶ。

それも当然。教え子が生身で IIS と戦闘をしているのだ。これで心配しないというのなら、教師失格だろう。

そしてそれは、私も同じ。もともと、美鶴の戦闘には賛成できない。これが生身対生身や IIS 対 IIS ならば問題ないが、これは話が別だ。

思い出すのは、第一回モンド・グロツソ決勝戦の日。思い出したくない、忌々しい記憶だ。トラウマといつてもいいかも知れない。だが、私は美鶴を止められなかつた。美鶴は戦いを邪魔されるとを嫌つてゐるし、それは私も同じだ。私も同じ、良くも悪くも戦士なのだから。

試合中もそうだ。美鶴が危険な動きをするたび、試合を止めようと思つた。しかし、美鶴とオルコットの戦いを見るつむに、止められなくなつた。

互いに、楽しそうに戦う姿。常識からかけ離れた、その圧倒的な戦い。人間は強さを恐れる生き物だ。だが、それは生半可な強さの場合。人が安易に想像できるよな弱い強さだ。だが、それを超える強さ、戦いは人間を魅了する。例えるならば、テレビで放映されるような格闘技の試合。本来、暴力と蔑まれても可笑しくない格闘技も、強者と強者のぶつかり合いえは人を虜にし、惹きつける。

そして、今繰り広げられている戦いだ。最初は騒いでいた観客も次第にその光景に魅了されていった。

それは、私も同じ。その光景は、弟と同じ年の少女に嫉妬するほどにだ。この戦いは、美鶴だけでは成り立たない。それと相対する強者が存在するから成立し、惹きつける。私ではない、別の戦士。

私以外に、美鶴を惹きつける女だ。

ふと、自虐的に笑みを浮かべる。

何がブリュンヒルデだ。私も、ただの女ではないか。

「織斑先生！ なに笑ってるんですか！？」

「山田先生、救援の必要はない。レーザーは師河に直撃していなかつたし、直前で回避運動をしていた。そこまで心配する必要はないだろう」

嘘だ。今すぐ美鶴の下に向かいたい。だが、向かわない。

思い出すのは、あいつの言葉。

「恐怖を感じる？ ならば、戦え。戦士ならば、戦うことで解決できるはずだ」

ならば、私も戦士として戦おう。この恐怖に、負けないために。美鶴が好きでいてくれる私のために。

身体情報確認。体の全身に強い痛み。爆風の衝撃と飛礫によるものと判断。コート上からだつたため貫通はなし。ただし骨折、もしくはヒビが入っていると思われる部位数箇所。ゴーグル右レンズ破損。ライフルスコープとの接続遮断。頭部に痛み。傷が広まつたと考えられる。ライフルに破損あり。残り数発が限度と思われる。以上、戦闘中止を推奨。

自己分析としてはこんなもんだろう。

結果としては、お嬢様にしてやられたわけだ。まさかレーザーが曲がるとはな。ISに常識は通じないってことか。

俺は立ち上がりながら、上空のお嬢様を見つめる。

ああ、すばらしいな。まさか、ここまでとは思わなかつた。

千冬にも、楯無にも劣らない。……いや、ここで他の女の名前を出すのは無粋だらう。

ああ、認めるさ。俺は、お嬢様に惚れちまつたようだ。いや、も

うお嬢様とは呼べないか。

「やはり、まだ立ち上がるのですね。そうでなくては、わたくしが追い求めていた美鶴さんではありません」

「ゴーグルより、お嬢様の声が聞こえる。いや、違うな。頭の奥から聞こえてくるような感じだ。

「それに、その眼。やつと、本気になつてくれたといつことじょうか？」

「……ああ、そういうことか」

道理で、こんな怪我だけで立ち上がれる訳だ。

俺は生命の危機に陥つたり、気分が高鳴ると目が紅くなり、身体能力が上昇する。理由はわからないが、原因は予想がつく。まあ、ドーピングみたいなものだと思えばいいや。

他の観客たちには見えないが、対峙しているお嬢様にはレンズが破損したことで見えるのだろう。

そういえば、この眼を初めて見せたのもお嬢様だったか。

「なあ、再開しようと思つんだけど、その前に聞きたいことがあるんだ」

「なんででしょうか？」

「名前、聞いてもいいか

「つ！」

お嬢様が、弾かれたように俺を見る。言葉の意味は、理解できたようだ。

ああ、そうだよ。そういうことや。わかってるんだが、お前には。だから、いえよ。それだけでいいんだ。

さあ！

「……セシリア。セシリア・オルコット。それが、わたくしの名前ですわ！」

そうセシリアは名乗つた。嬉しさを抑えきれないのだろう。顔はこれでもというほど笑顔で、とても魅力的だった。

「セシリア、大好きだぜ！」

「わたくしもですわ、美鶴さん！」

それと同時に、俺たちは動いた。

ビットが、俺の背後より狙いを定める。だがそれは、俺には見えていた。

振り返ることもせず、ライフルだけを背に向け、ビットを撃ち落す。

「背後を見ないで！？」

ああ、そうだよ。見ていないさ。でも、見えている。今の俺には、三百六十度すべてが見えているんだ。

ビットはすべて破壊した。だが、ライフルの破損も大きい。これ以上使うのは危険だろう。

俺はライフルを捨てると、リボルバーを取り出しセシリアに向ける。それと同時に、発砲した。

リースカートよりミサイルが発射されるが瞬間、それは弾丸に貫かれ爆発した。それによりミサイル発射口を破壊し、セシリアのシリードエネルギーが削られる。

「今までよりも速い！」

それは当然だ。このリボルバーは長年愛用しているものだ。ＩＳには威力が不十分だったために使わなかつたが、速さと正確さだったらライフルなどと比べ物にならないさ。

セシリアはライフルを構えなおすと、俺へと撃つ。だが、無駄だ。俺は先ほどよりも何倍も速く、地を駆ける。その速度はＩＳにも劣らないかもしれない。

だが、これはドーピングだ。時間制限も、その後の反動もある。何時までも避けているだけでは、ダメだ。

俺はセシリアに向かい合いつつ立ちはだかると、リボルバーを構える。

「勝負だ、セシリア！」

「望むところです！」

セシリアと俺が、同時に動く。

世界が静止したと思つほど、時間がゆっくりになる。狙う、一つだけ。

互いに銃口を向け合つ。そして、引き金を引いた。

勝負の差は、コンマ数秒。だが、音速に達する銃弾の速さの前には、それが決定的な差だった。

俺の放つた銃弾は、セシリアのライフルの銃口を貫いた。ライフルが破裂し、その爆発がセシリアのシールドを大幅に削る。銃弾では、たいしたダメージは与えられない。だが、ライフルを破壊するくらいは十分可能だ。

「まだまだ！」

セシリアの叫びが響いた。爆発の中より、インターフェプトを構えたセシリアが急降下していく。

「勝つのは、わたくしです！」

速い。そう思った瞬間には、セシリアは俺に肉薄していた。振るわれるインターフェプト。反射的に、それに銃弾を撃ち込む。両者の武器が弾かれ、宙を舞つ。

右手に痺れるような感触。しばらくは使い物にならないだらう。「来いよ！」

「ああああああ！」

セシリアは拳を振り上げる。だが、構えが大きい。もともと、ISによつて大柄になつてゐるのだ。懷に入るには十分だ。

セシリアの腹部を、左手で殴りつける。手には、何かに阻まれるような感触。これがシールドなのだろう。

だが、そんなことは気にしない。足を踏み込み、腰を入れ、全力で振りぬく。

「うらああああああ！」

それはシールドを貫き、腹部に当たる瞬間に絶対防御を発動させた。俺よりも巨体なはずのISが、宙を力なく飛んだ。そして背中から落ちると、地面を滑るり、止まつた。

『……勝者、師河美鶴！』

ブルー・ティアーズのシールドエネルギーが空になり、スピーカーから山田先生の声が響いた。

会場が、沸きあがる。途端に、アリーナに救急班が入ってきた。セシリ亞のISが消えて、待機状態に戻る。

これで、試合は終わりだ。生身でISに勝つといつ、常識外れなことをやつてのけた俺は、少しは喜ぶべきなのかもしね。だが、まだだ。まだ、終わっていない。

「そうだろ、セシリ亞」

「当然、ですわ」

セシリ亞は、笑つて立ち上がった。ISに乗つても、疲労は溜まる。それにセシリ亞は、俺の前に一夏とも試合をしたのだ。すでに、満身創痍といった様子だ。

それは、俺も同じ。すでにドーピングの効果は切れ、一気に痛みが押し寄せてきた。今にも、倒れそうなほどだ。

だが、まだ終わっていない。試合は終わったかもしね。戦いはまだ終わっていない。

「あと、一発つてところか」

「そう、ですわね。女性を、ここまで傷つけるなんて。紳士として失格でしてよ」

「そりか？ 以後気をつけとしよう」

お互に、冗談をかます。そんな余裕はないのに、そんな状況でもないのに。

まるで恋人が互いを茶化すように、笑つた。

瞬間、互いに駆け出す。相手だけを見つめて、走り出した。

全身が悲鳴を上げる。体が軋む。骨が悲鳴を上げ、止まれと叫ぶ。だが、止まらない。止められはしない。

「セシリ亞！？」

「美鶴！？」

ここまできたら、性別による体格差や腕力など関係ない。どちら

も、一撃で終わりだ。勝敗を決めるのは、意地と執念だ。

拳と拳がぶつかり合つ。痛みが腕を伝わり、全身に響いた。

それに耐えると、俺はセシリアを見る。すると、眼が合つた。透き通ったブルーのきれいな瞳だ。

その眼が、すべてを語っていた。

「なにか、いふことは？」

俺が聞くと、セシリアは柔らかく笑う。

「……次は、負けませんわ」

そして、セシリアが崩れるように倒れた。俺はそれを抱くように支える。

意識のないセシリアを優しく、包み込むように抱いた。柔らかく、暖かい。撫るように髪の毛に触ると、いいにおいがした。俺とは違う、セシリアの匂いだ。

それあ、妙に恥ずかしくて、気持ちよくて……。

そこで、俺の意識は途絶えた。

「……ん。つー？」

眼が覚めたらと思つたら、全身に痛みが走つた。もうどこが痛いのかもわからないほど、隈なく全身が痛い。

眠気など一気に吹き飛び、強制的に覚醒させられる。

「起きたか」

その声は、千冬のものだ。見ると、ベッドの横の椅子に座っている。

「ここは？」

「医務室だ。何があつたか覚えているか？」

「……大体な」

そういうながら、記憶を整理する。セシリアが氣絶して、それを

支えて、俺も限界が来た。まあ、そんなどこらだな。

「情けない。まさか意識を失うとはな」

「それはしようがないだろう。眼が、紅くなつた影響もある」

「わかるのか?」

モニターから見られでもしたか?

「体の傷が回復している。少なくとも、重症レベルの怪我はない。  
それがなければ、今頃暢気に寝てられないだろう」

体の異常な回復力。これも、眼が紅くなつたときに起つる現象だ。  
本来なら重態でもおかしくない戦いのあとなのに怪我は少ない。そこ  
から、千冬は予測したのだろう。

「千冬、ありがとな」

「なにがだ?」

「途中で戦いを止めなかつただろ?」

正直、教師としては何時止めてもおかしくない内容だ。

「何だ、止めて欲しかつたのか?」

「まさか」

もし止められてたら、俺は千冬を嫌いにこそならないが、それでも、失望してしまつところだろう。まったく、自分勝手な性格だな。  
「なら、気にするな。私は戦士として自分の弱さと戦い、美鶴の恋  
人として当然のことをしてただけだ」

「千冬」

「なんだ?」

「愛してるぜ」

そういうと、千冬は表情こそ変えないが、恥ずかしそうに顔を赤  
くする。それが、とてもかわいかった。

「……何か聞きたいことはあるか?」

「セシリアは?」

「オルコットなら、もう回復して部屋に戻つた。肉体的損傷は打撲  
程度だ。気絶したのは、精神的疲労からだな」

それを聞いて、安心した。さすがに、俺以上の怪我などといわれ

ては寝覚めが悪い。

「それで、戦いを見た感想は？」

山田先生なんかは、終始顔を青くしていただろうけど。

「俺に惚れ直したりした？」

「ああ、した。オルコットに嫉妬するほどだ。悪いか？」

顔を赤くしながら、俺を睨んでくる千冬。

「ああ、そうさ。年下の小娘に、年甲斐もなく嫉妬したさ。まったく、私というものがありながら、どうしてそういう気が多いんだ」

「しようがないじゃん。そういう性格なんだ」

「ああ、しようがないさ。だからだ、私がこれから憂や晴らしに向をしようと美鶴には関係ないな」

あ、嫌な予感。どうにも、千冬の顔が笑っている気がする。

「つー？」

千冬が、俺の体に触れる。途端、全身が痺れるように痛んだ。

「どうだ、痛いだろう。痛くて、体は満足に動かせないな」

「ちょ、ちょっと待て。何する気だ！？」

「なんだ、忘れたのか？ 続きは後で、と誘つたのは美鶴だらう。存分に楽しもうじゃないか」

「俺は楽しくないぞ！」

「私は楽しいので問題ない。全身に痛いほど、私のすばらしさをわからせてやろう」

「ふざけるな！」

俺は無理やりするのは好きだけど、逆は嫌なんだよ。どうにも、嫌な思い出が蘇る。

「誰かいないのかよ！」

「美鶴の看病は、私がすると云々てある。誰にも邪魔はさせないさ。お前も男なら、過去の悪夢くらい乗り越えて見せろ」

これは、もう何をいっても無駄だ。諦めるしかない。

「千冬」

「なんだ？」

「優しくしてね」

「ああ、善処しよう。愛してるぞ、美鶴」

翌日、朝のショートホームルーム前。

未だに全身は痛むが、それでも昨日ほどではなく、日常生活にも問題はない。

あと、千冬になら無理やりされるのも悪くなかった。

「あの、師河くん。握手してください」

「どうすればあんなに強くなれるんですか?」

「オルゴットさん。お姉さまと呼ばせてください」

「ぜひEISの操縦の秘訣を!..」

俺とセシリアは、朝からこんな感じだった。

どうも、昨日の戦いを見ててくれた生徒たちが押し寄せてきているようだ。

「まいったな。俺のかっこよさは隠せるものではないか。モテる男は辛いぜ」

「お前、すごいバカなこといつてるな」

「つむさいな、一夏くん。女の子の人気を独り占めしてるからと嫉妬するもんじゃないぞ。それに、お前には籌がいるだろ。

「何で籌が出て来るんだよ?」

「さあ、何でだろうな」

そこに、千冬と山田先生が入ってくる。

「他のクラスの者は散れ」

その一言で、教室は何時もの様子に戻る。さすが、といったところだろう。その教師ぶりは、普段のだらしない姿からかけ離れていく。なかなかに、上手く猫を被つているものだ。

「何かいいたいことでもあるのか?」

「何もありません、織斑センセ」

まだ何かいいたそうな顔だが、それでも山田先生へと向き直ると、

「山田先生。ホームルームを始めてくれ

「はい。それでは、クラス代表のことからです。一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繫がりでいい感じですね！」

嬉々として話す山田先生。そこまで面白いことでもないと思つが。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん

「なんで俺がクラス代表なんですか？」

「それは、師河くんとオルゴシトさんが辞退したからです」

「なんでだよ！？」

「なんで、つていわれてモナ。

「なんか、めんどくさそうだし」

もともと、セシリ亞と戦いたいから決闘を受けたみたいなものだ  
し。

「なら、俺に勝ったセシリ亞は？」

「残念ながら、わたくしはさらに自分に磨きをかけ倒さなければならぬ相手がいるのです。申し訳ありませんが、クラス代表という責務を全うする時間がありませんの」

そこでセシリ亞は意味ありげに千冬を見ると、

「よろしいでしょか、織斑先生」

「ああ、いいだろう」

きっと、マンガなら互いの視線がぶつかって火花が散つていると  
ころだらう。

教室の温度が下がつた気がした。

「そ、そういうことで。織斑くん、お願いしますね」  
場を取り成すように山田先生が笑つた。

「……マジかよ」

「まあ、がんばれよ」

「他人事だな」

「他人事だよ」

まあ、サポートくらいはしてやるよ。

「まあ、いいじゃん、世界で一人しかいない男子なんだから。それを持ち上げないと」

「私たちは貴重な経験が積める。他のクラスの子に情報が売れる。一粒で一度おいしいね、織斑君は」

うん、クラスのみんなも乗り気なようでよかつた。

「案ずるな、一夏」

「篠、お前は俺の味方だよな」

「これからも、クラス代表に恥じないよう厳しく鍛えてやる」

これで、一夏の味方はいなくなつたわけだ。いや、篠もたぐましくなつたな。

「それでは、クラス代表は織斑一夏。依存はないな」

クラスが一丸となつて返事をする。

すばらしい。一夏以外、今日もいい日になりそうだ。

## 決着 そして……（後書き）

これで一巻の前半部分は終わりです  
次回より、鈴登場ですね

この話にはよく戦士という言葉が出でますが、好きな小説のパロ  
だつたりします。それ関連のキャラもそのうち微クロスとして出て  
きます

その他にも微妙にパロディやクロスを入れる予定です  
それでは、感想お待ちしています

女の戦い（前書き）

鈴のキャラが掴みにくい

## 女の戦い

「ではこれよりIRSの基本的な飛行操縦を実践してもらひ。織斑、オルコット。試しに飛んで見せろ」

あれから日が経ち、桜もすべて散った頃。今日も今日とて、俺は授業を受けていた。

どうやら、一夏もセシリ亞も大した怪我はなかつたようだ、今では何の問題もなく授業を受けている。

俺も、ほぼ全快だ。強いていれば、まだ腕に違和感を感じる程度だろう。

「早くしろ。熟練したIRS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」しかし、あれだね。IRSスーツというのはすばらしいね。

女性の体のラインがくつきり浮き出る。貧乳、巨乳、美乳と眺め放題。ヒップや腰周り、腿や腕も重要だ。改めて、この学園に入つてよかつたと実感するよ。

どうせなら、千冬もジャージではなくてIRSスーツを着てくれればいいのに。最近見ていないので、久しぶりに見たいもんだ。

「師河、何を考えている」

「いえ別に何も」

俺の邪念を読み取つたのか、千冬に睨まれた。ああ、恐ろしい恐ろしい。

そんなバカなことを考えている間に、セシリ亞と一夏はIRSの展開を終えた。

一夏は時間がかかつたが、セシリ亞はさすがといつべきか。一瞬の間にIRSを開封し終わつた。まるで戦隊物のヒーローみたいだな。俺も変身とか叫んでみるか。

「よし、飛べ」

セシリ亞は素早く行動した。急上昇し、すぐに地上からは満足に見えなくなる。「ゴーグルの望遠機能を使わなくては見れないほどだ。

大体、一百メートルといつところか。決闘であれだけの高度を取られなくてよかつた。負けはしないが、勝つことも難しくなつていただろう。

ちなみに、俺の今の姿は一夏と同じザインのHHSース。それに、戦闘用のブーツとグローブ。腰にはリボルバーと予備の銃弾で最低限の武装。さすがに止められたが、普段から身に着けている俺としては、これがないと落ち着かない。無理をいつて許可をもらつたのだ。

あとは、修理に出したゴーグルだ。普段は頭にかけるだけだが、今はセシリアたちの姿を捉えるために顔まで降ろしてくる。

#### 閑話休題。

一夏もセシリアを追うように飛ぶが、どうにもぎこちない。やはり、まだ飛ぶというイメージが掴めていないのだろう。

上空では、セシリアと一夏が会話している。口の動きから、ビックも飛行のコツを教わっているようだ。

反重力力翼や流動波干涉なんて一夏には理解出来ないと思つぞ。「上で二人は何をしているんだ？」

隣で上空を見上げていた筈が聞いてくる。そんなに眼を凝らしても、豆粒程度にしか見えないだろう。

「大した話じやない。気になるのか？」

「まあな。私は嫉妬深いんだ」

そう、慄然と答える筈。それが、少し意外だつた。

「へえ、ずいぶんはつきりいうじゃないか。昔のお前なら、一夏が他の女といふだけで不機嫌そうに怒つてるぞ」

「セシリ亞は美鶴の彼女だら。なら心配はいらない、といふこともある」

「他にあるのか？」

「いい加減、私も立ち止まつてるのは疲れたんだ。そろそろ歩き出さうと思つてな」

「そう、筈は笑つた。」

入学した頃の簞からは考えられない言葉だ。暗く、濁つていて、

他人を嫌い、自分を嫌っていた、棘のある簞からは。

「何があつたか知らないが、いいんじゃないか。今の簞なら、うつ

かり告白するかも知れないぜ」

「抜かせ。私は浮氣者は嫌いなんだ」

「それは残念」

「そこ、授業中に私語をするな！」

千冬に怒られたことで、会話は中断する。互いに苦笑し、肩を竦めた。

「織斑、オルコット。急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ」

その言葉に、セシリ亞はどんどん地上に降りてきた。そして、完全停止も難なくクリア、と。さすがは代表候補生。いや、セシリ亞・オルコットといったところか。

次に一夏が降りてくる。が、今度はセシリ亞のよつこ上手くはいかず、地上にクレーターを作る結果となつた。

「大丈夫か、一夏！」

「ああ、なんとかな」

簞が穴に駆け寄ると、一夏が這い出でてきた。

「そうか。だが、情けないぞ。昨日私が教えただらう

安心したような、呆れたような複雑そうな表情の簞は、手を伸ばし一夏を引きずり上げた。

「サンキュー、簞」

「うむ！」

簞は照れを隠すように、慄然と頷いた。

「あら、なかなかいい雰囲気ですわね」

セシリ亞が、微笑ましい物を見たような顔で近づいてくる。

「さすがだな。当たり前だが、一夏と大違いだ」

「ありがとうございます。ですが、織斑さんならすぐ強くなりますわよ」

「わかるか？」

「ええ、一度戦いましたから」

ま、あいつは色々と素質があるからな。主人公補正とか。

「でも、俺には負けるけどな」

「わたくしには劣りますけど」

お互いに、笑った。それは、一夏を見下しているのではない。た

だ、負けず嫌いだけだ。

そう簡単には負けてやらない」という、意志の表れだ。

「篠ノ之、そろそろ戻れ。織斑、次は武装展開をしろ。それくらいは自在にできるようになつただろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし。でははじめる」

一夏は右手を伸ばすと、意識を集中する。そして光が放出され、手には雪片状型が握られていた。

「師河」

「え、俺？ なんですか？」

一応敬語ではあるが、誠意のこもつていらない声で返事をする。「織斑が武装を開く間、お前ならその銃で何発銃弾を放てる？」「条件にもありますが、互いに静止している状況なら全弾撃つて、弾の再装填までできますね」

戦闘中でも、今の一夏になら少しの間があれば全段当てる」とくらいいはできるか。本音をいえば、武装以前にEISを開く隙に一発で終了だけど。

「そういうことだ。最低、0・5秒で出せるようになれ」  
さすが千冬、厳しいね。まあ、俺も同じこというだらうナビ。

「オルコット、武装を開く」

「はい」

といった瞬間には爆発的な光が放たれ、セシリ亞の手にはライフ

ルが握られていた。

「さすがだな、代表候補生。それで、一体誰を狙う気だ」

セシリアは、ライフルをいつでも銃撃ができる姿勢で構えている。それ自体はすばらしいだろう。即座の戦闘にも十分対応できる。

問題は、その銃口の先。それは、千冬へとまっすぐに伸びていた。

「ああ、すみません。敵に対しても構える癖がついておりますの」

「それは立派だな。だが、誰を狙っているのか正しく判断できないようでは痛い目を見るぞ」

「じ心配なさらず。わたくしが狙つのは、常に打倒すべき相手だけですわ」

セシリアと千冬は、冷たく笑った。

ヤバイ、空気が重いぞ。まあ、俺が原因なんだろうけどさ。

「次は近接武器だ。やれ

「わかりましたわ」

ライフルを握る手とは逆の、空いている手。それも光が包んだと思つたら、小型ナイフが現れた。

その瞬間だ。千冬は一步踏み出すると、出席簿をセシリアの喉下に突きつけた。

「つ！」

ライフルの間合いに入られての一振りを、セシリアには防ぐことができない。ナイフで防ぐこともかなわず、セシリアは苦悶の声を漏らす。

「先の決闘もそうだったが、懐に入られてからの対応が遅い。そんなことだから、力の差がある筈の織斑に一撃を貰つたんだ」

「おいおい。ライフルよりは遅いとはいえ、一夏の展開速度よりは十分速いぞ。千冬の近接攻撃に反応できるヤツなんて、国家代表レベルでもないと無理だ。

いつていることは間違つていないが、要求レベルが高すぎる。これは、私が混ざつてきているな。もう少し公を心がけろよ。

「ありがとうございます。今の攻撃程度、すぐに防げるよう精進

いたしますわ

そういうて、やはり静かに笑つた。ああ、殺伐としてるな。

「おい、美鶴。どうにかしわ」

「なんで？」

「お前のせいだらうが！」

あ、やつぱりわかるか。といつても、俺にもどうしたものか。誰か、正しい対処法を教えてくれよ。

「ふふふ」

ひつして、気が休まることなくこの授業は進むのだった。

放課後。体の調子を確かめるためのトレーニングも終わり、軽く休息を取つた後。やることもなくなつたので、暇つぶしに一夏と第のトレーニングを覗きに行くことにする。

だがその途中で、目的の人物とは違つ、見知つた影を見かけた。

「あれは？」

その影を追いかけと、やはりそつだ。

「よひ、鈴」

「……美鶴？」

俯いていたその人物が、顔を上げる。どうも心ここにあらずのようで、俺を認識するまでに時間がかかった。

その人物は、凰鈴音。俺の幼馴染だ。

「ずいぶん暗い顔してるな。どうしたんだよ」

「あんた、変わらないわね。久しぶりに会つたんだから、もう少し  
「うことあるでしょ」「う」と

呆れたように声を漏らす鈴。似たようなことを、違う幼馴染にいわれた気がする。

「そういう鈴じこを変わらないな。昔のまんまだ」

「どじが？」

「胸と身長」

「死ね」

殺氣！？

突然、鈴が殴りかかってきた。憎しみと殺意がこもった、重い拳だ。それを受け止める手が痺れた。

「突然なんだ！？」それが久しぶりに再会した愛すべき幼馴染に対する態度か！ それとも、ツインテールだからシンデレに徹しようとしているのか。それとも、現代の若者らしく切れ易いのか。カルシウムを取れ、カルシウムを。そうすれば少しは身長と胸がだな…」

「どれも違うわ。純粹なる殺意よ！」

「落ち着け。世の中には需要と供給といつものがあつてだな。供給者が入ればそれを必要とする者もいる。つまりだ、貧乳で小さい女の子を愛する大きなお友達もたくさんいる。諦めるな！」

「むしろ諦めたいわ！」

「おお、神様。俺の幼馴染は何時、どんな理由からこんなに凶暴になつたのでしょうか。」「さつきからよ！」

「ああ。殺氣とさつきをかけたのか。なかなか上手いことをいうな

「そんなツマラナイ冗談いつつもりはまったくないわよ…」

「上手いといえば、腹減つたな。何か上手いものでも食こに行こうぜ」

「つ！……もういいわ。美鶴と話してもこっちが疲れるだけよ」

「俺は鈴と話すの楽しいけどな」

鈴をからかうのはとても楽しい。

もう一夏のことはどうでもいいや。鈴をかまつて遊ぶ……、再会を祝して親交を深めるとしよう。

「食堂行こうぜ。ラーメン食べよう、ラーメン。鈴といえばラーメンだからな」

「はいはい、わかったわよ。あ、それと」

鈴が、何かを思い出したよつて聞こてきた。

「何だ？」

「一夏と最近親しい女子、いたりしない」

じつして、俺は懐かしい幼馴染と再会した。  
一夏よ。お前はその恋愛体質を何とかしろ。

## 二人の関係（前書き）

今回は少し短くなつております

## 二人の関係

「というわけでっ！ 織斑くんクラス代表決定おめでとうー。」

クラッカーが乱射され、一夏の頭に紙テープが降り注ぐ。  
夕食後の自由時間。場所は寮の食堂だ。

このようなイベントが企画されていたとは露知れず、鈴と夕飯を  
食べ終え部屋で休んでいたところを連行されたのだ。

「あと、師河くんとセシリ亞も、すごい試合を見せてくれてありが  
とうー！」

と、俺たちにもクラッカーが鳴らされる。

何とも、微妙な気分だ。女の子に注目されるのは楽しいけどさ。  
別に祝福されたくて戦つたわけじゃないし、自分たちで戦いたいよ  
うに戦つただけなのだが。

まあ、女の子にチヤホヤされるのはいいことだよな。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるね」

「それに、こんなに強い生徒が一人もいるんだよ。これは全校の注  
目を集められるよ」

「このクラスになれてよかつたよ」

「ほんとほんと」

おかしいな。明らかにクラス以上の人数が集まっている気がする。

「ふふ、お互い大変ですわね」

セシリ亞が一人分のグラスを持つて隣に座る。そのうち一つを受け取り、軽くグラスをぶつけ合った。

「いやいや、これは役得さ。俺は一夏のように、この状況を楽しめ  
ないバカじやない」

見ると、一夏も多くの女子に囲まれ疲れた顔をしている。籌はそ  
れに不機嫌そうな顔こそしているが、辛く当たるような真似はして  
いないで、一夏に冷たいものを渡していた。

「あら、わたくしだけでは不満ですか？」

「それは、セシリアが俺を満足させてくれるかによるな」「その言葉に、セシリアは顔を赤くする。なるほど、こう攻めには弱いわけか。

「残念だな。俺はセシリアとなら何時でもいいのに」

「わ、わかりましたわ！ 美鶴が望むなり、今夜にでも」

「いや、さすがに今日は無理だろ。アリーナの貸し出し許可も下りないだろ？」「

「……アリーナ？」

「だから、また戦おうって話だろ」「

「……！」

途端、言葉の意味がわかつたのか真っ赤に顔を染めるセシリア。ヤバイ、かわいいな。もつといじめたくなる。

「どうした、顔が赤いぞ。まさか、違うことでも考えていたのか？」「

「そ、それは、ですね」

「セシリ亞ってさ。思つたよりエロイのな」

そこで、セシリ亞は撃沈した。机に寝そべるよつに顔を隠す。

「はいはーい、新聞部です。話題の新入生、織斑一夏くん、師河美鶴くんに特別インタビューをしに来ました～！」

盛り上がる参加者一同。ノリがいいな。

「あ、私は二年の薫薰子。よろしくね。新聞部の副部長やつてます。はいこれ名刺」

あ、この名刺名前しかないぞ。これでは電話にメールができないじゃないか。

「ではではすばり織斑くん！ クラス代表になつた感想を、どうぞ

！」

「えーと……まあ、なんといつか、がんばります

適當だな。もう少しやる気だせよ。まるで、望んでクラス代表になつたのではないともいいたそうじゃないか。

「えー。もつといこコメントちょうどよい。俺に触るとヤケドするぜ、とかー！」

「自分、不器用ですから」

「どちらも前時代的な言葉だな。

「まあ、いいや。適当に捏造しておくからいいことして」

「この新聞記者に、報道の正義とはないらしい。まったく、なんといつことだらう。おもしろそ�だから是非やってください」。

「じゃあ、次は師河くんコメントちよつだい」

「はい、好きなタイプは『スローリ銀髪赤目』の美少女です」

「いや、そんなこと聞いてないんだけど」

「嫌いなタイプはウサ耳です。バーニガールは一族郎党皆殺しだされ全滅してネコ耳メイドが流行ればいいと思います」

「ウサ耳に何の恨みが！？」

色々あるわ。どこのバカウサギとかバカウサギとかバカウサギとか。

「あ、嫌いなのは白ウサギなので、黒ウサギは保護します」

「いや、だからセウジヤなくて」

「他に何か聞きたいことでも？　あ、初体験の年齢ですか。それはプライベートなことなのでちょっと。ちなみに、一夏はまだチエリーですよ」

「俺を巻き込むな！」

会場が大きく沸いた。幕も小さくだが、拳を握り締め喜んでいるのが見える。

「ああ、もう。私が聞きたいのは一つ。たつちゃんとのこととクラス代表決定戦のことよー！」

「はて、たつちゃんとな？　誰だらう、それは？」

「南ちゃんと幸せになれるといいと思いますよ」

「そのたつちゃんじやない！　更識楯無のことー。少し前、学校中でダンパチやつてたでしょ？？」

「ああ、楯無ね。そういうばやつてたつけ。

「更識楯無？」

「誰ですか、それ？」

「ああ、そうか。まだ一年生には馴染みがないのね。」この学園の生徒会長で、学園最強を名乗る生徒よ

「その生徒会長が、美鶴と何か関係があるのか？」

「決闘の一週間くらい前からかな？ 放課後、毎日のように二人が戦っていたのよ」

「どうにも、反応が鈍い。どうも、樋無のことがよくわかつていないらしい。

「その生徒会長とは、どのような人なのですか？」

「だから、この学園の最強よ。生徒会長ってのは、この学園でもっとも強くないと名乗れないんだけど、たつちゃんはまだ一年生なのにその座にいるの。しかも、IS学園の生徒でありながら自由国籍を持つロシアの国家代表なの」

説明。苦労様。そこまで聞いて、やっと樋無のすじさがわかつたらしい。

「そ、それ本当なんですか！」

「代表候補生じゃなくて、代表！？」

「それって、昔の千冬様と同じじゃない！」

「美鶴、あなたって人は、わたくしの知らない間にどれだけの女生と関係を持っているのですか！」

「だあ、うるさい。少し落ち着け！」

さすがにこの剣幕で詰め寄られるといつもこのど、何とか押しとどめる。

「たつちゃんのことをわかつてもうえたといひで。聞かせてもらえる？」

「聞かせて、といわれてもな。

「実践は久しぶりだったから、ちょっと鍛錬に付き合つてもらつただけだ」

「あれを鍛錬で片付けていいのかしら……」

「そんなにすじかつたんですか？」

「すじかつた」

「薰子先輩は、一言そういうつた。

「アリーナやグラウンドじゃなくてさ。上級生の校舎全部が戦場つて感じ？ 師河くんはアサルトライフルを容赦なく発砲するし、たっちゃんは鉄扇や格闘技で肉薄する。一人が通り過ぎた後に残るのは、校舎が破壊された跡だけ。一步間違えば大怪我しそうなのに、二人とも楽しそうに笑ってるんだ。特にたっちゃん。今まで見たことないような、本当に楽しそうな顔で笑うんだ。これはもう、何かあるとしか思えないでしょ？」「う

「……美鶴。俺と篠が剣道場いる間、そんなことしていたのかよ」「そういえば、山田先生が疲れた顔で、恨みがましく美鶴の顔を見ていたような

いやあ、反省文なんかで迷惑かけたからな。

「で、どうなんですか、美鶴！ その樋無さんとはどのよつな関係ですの！」

肉体関係か？ や、何度か寝たことはあるけどさ。でもな、別に恋人つてわけじゃないよな。まあ、嫌いじゃないよ。むしろ好きだけどさ。多分、樋無も俺のこと好きだし。互いの家の関係で、付き合つわけには行かないけど。寝たのだけ、そういう場面でなら色々な監視を誤魔化せるという意味もある。どっちかというと、ビジネスライクな関係だ。

「家同士が古い知り合いなんだよ。まあ、幼馴染みたいなもんだ」

「本当に？」

「さあ？ どう受け取るかはお任せするよ。食材は提供したんだ。料理するのはそっちの役目だら

「そういわれたら、こっちも引き下がるしかないか」

「そうだろうな。すべてを教えはしないが、嘘も教えない。どういふ解釈もでき、だからといって核心を教えてないからこちらに特別被害がない。

樋無との関係がウワサされようが、俺はどうでもいいさ。逆にそつちの方が、裏の繋がりを邪推されなくていいくらいだ。

「では、次の質問です。HSと生身で戦つたらしいけど、本当?」

「本當だけど、それが?」

「それが、で済む問題じゃないでしょ! ただでさえ正氣の沙汰とは思えないのに、勝つたんでしょ? 信じられないわ」

「別に、軍用じゃなくて試合用だろ? コミッターがかけられてるんだ、別に不可能じやないわ」

軍用でも関係ないヤツもいるけど。俺の身内とか。

「さすが、たつちゃんと互角に戦うだけあるわね。今年の一年生は、悔れないわね」

と、そこで一通りメモに書き留める黛先輩。

「セシリ亞ちゃんは、何か『メントある? 代表候補生がHSを装備していない人間に負けたんだけどさ』

「わたくしは死力を尽くして戦い、美鶴はそれに答えただけですわ」

「なるほどね。いい『メントをありがと』」

そこで、黛先輩はカメラを取り出す。

「それじゃ、写真取りましょうか。織斑くん、師河くん、セシリ亞ちゃんの三人で並んで」

俺はセシリ亞に並ぶように立ち上がると、

「セシリ亞」

「はい?」

セシリ亞が無防備にこちらを向く。

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24はー?」

「え? えっと・・・?」

「ふー、37・5でしたー」

そんなよくわからん合図と共に、フラッシュが光る。  
だが、俺はそんなことを気にしない。

「え?」

「はい?」

周りから、間の抜けた参加者の声。いつの間にか、一組の全メンバーが集まっている。その皆が、いっせいに俺とセシリ亞を見る。

さて、何故そんなことになつたかといふとだ。

俺がセシリ亞を抱き寄せ、キスをしているからだろ？  
俺はたっぷりとその唇を味わつと、顔を真っ赤にしているセシリ  
アより離れる。

「な、な、なにを……？」

「いや、キスだけど。あ、写真撮つた？」

「あ、うん、撮つたけど」

「じゃあ、焼き回しちょうだいね」

何時もの調子で、俺はそういった。

「ええええええええええええ……！」

絶叫が起きる。

「なになに！ 師河くんとセシリ亞ってそういう関係なのー？」

「私、師河くんのこと狙つてたのにー！」

「こんなところでキスするなんて大胆！－！」

そんな騒ぎの中、当事者であるはずのセシリ亞は未だに状況がつかめていないようだ。

「あ、あの、今、キスされましたの？」

「そうだよ。もう一回しようか？」

「な、何で……？」

何でつていわれてもね。

「さつきの言葉、なんかかつこよかつたからさ」

「そうだよ、俺たちは互いを求めて戦つただけだ。憎しみも怨みも殺意もない。ただ、セシリ亞が欲しかつただけだ。そして、今もそうだ。

「セシリ亞とキスしたくなつた。だから、しただけだ」

「おお、こっちの方がよっぽど記事になるわ」

黛先輩や、他の生徒たちは大喜びしている。やはり、この年頃の女子は色恋沙汰が好きなのだろう。

「あ、あの。美鶴・・・・・」

「ん？」

「もう一度、いいでしょつか。その、急なことだったので、実感が持てなくて」

「もちろん、喜んで。だけど」

と、セシリ亞の手を取る。

「悪いが、ここからは一人の時間つてことで」

セシリ亞の手を引き、食堂より逃走する。

「え？ あ、あのー」

「あとは頼むぜ、一夏」

「どこ行くんだよ！？」

「決まってるだろ」

二人だけになれる場所だよ。

## 一人の関係（後書き）

早くシャルヒラウラを出したい、色々ネタ満載の短編を書きたいです

ザ・カード（前書き）

さう、たまたま田舎ランキングに入ることがあるみたいで、いつも読んでくれてありがと、ついぞこまか

## ザ・サード

「ねえねえ、昨日あの後どうなったの？」

「二人でどこいったの？ 教えてよ」

次の日、俺とセシリアは朝から質問攻めにあつていた。

まあ、昨日のことを考えればしかたないのか。

「それは、その……」

顔を赤くして俯くセシリア。恥ずかしそうに、下半身をむずむずさせている。

「ま、内緒つてことで。こうのは、一人だけの秘密にしておくからいいんだよ」

「えー。どうしてもダメ？」

「ダメ」

といつと、ようやく俺たちは解放された。

まあ、強いていうならば、だ。恥ずかしそうにシーツに包まるセシリアはとてもかわいかった。

「しょうがないな。じゃあ、この話は知ってる？」

終わつたと思つたら、すぐに次の話題だ。女子といつものは、よく話題が尽きないものだ。

「中国の代表候補生が、転校してくるんだって」

「転校、ですか？ この時期に」

「今は四月だろ？ なんでこんな中途半端な時期なんだ？」

一夏が会話に混ざってきた。隣には、筹も一緒にいる。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？ 騒ぐことの程もあるまい。それよりも、今は来月のクラス対抗戦のほうが重要ではないか？」

クラス対抗戦とは、クラス代表同士のリーグマッチだ。一組からの出場者は、もちろん一夏だ。

「そうだぞ。一夏の双肩には、学食『ザート』の半年フリー・パス券が

かかってるんだ。死んでも勝てよ

「そうだな。どうせやるなら、優勝狙つか。セシリ亞、悪いけど放課後、練習に付き合つてもらえるか？」

「わたくし、ですか？」

「む。一夏、私では不満なのか？」

不思議そうな顔のセシリ亞と、不機嫌そうな篠。

「いや、HSの模擬戦を頼めるのはセシリ亞しかいないだろ？」

篠も美鶴も、訓練機を借りるんじや時間がかかるし」

「まあ、それはそうだな。セシリ亞だつたら射撃主体の相手との練習になるし、強くなるんだつたら格上にボコられるのが一番だろ」

「そうか。そういうことなら、しかたないな。だが、私との剣の練習をサボることは許さんぞ」

「わ、わかってるって」

ついでだ。

「俺も少し揉んでやるよ」

「俺も少し揉んでやるよ」

「俺もHSの操縦をセシリ亞に教わろうと思つていたからな。そのついでだ。篠、セシリ亞、俺。この三人相手にみつちりやれば、まあ優勝できるだろ」

上手い具合に、生かさず殺さず躰けるか。

「織斑くん、がんばつてね」

「フリー・パスのためにね！」

無邪気な、クラスメイトの声援がした。これから一夏が見る地獄も知らないで、気楽なもんだ。その地獄を見せるのは俺なんだけど。

「今のところ、専用機を持つているクラス代表って一組と四組だけだから余裕だよ」

「その情報、古いよ」

会話に割り込むように、聞き覚えのある声がした。

「一組も専用機持ちがクラス代表になつたの。そう簡単には優勝できないから

腕を組み、方膝を立ててドアにもたれているのは、鈴だった。

「そういえば、一夏に教えるの忘れてたな。

「鈴……？　お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

どこかかっこつけた話し方。すごい似合わない。久しぶりの再会だから、気持ちはわからんでもないけど。

「おい」

「なによ……つ！？」

鈴が振り返った瞬間、後方へ飛んだ。頭へ振り下ろされた出席簿を避けると、腰を落とし地面を力強く踏み込むと寸勁を撃つた。なるほど。鈴の中国拳法は久しぶりに見るけど、キレが上がってるな。ただ、相手が悪い。

「まさか久しぶりの再会で、いきなりケンカを売られるとは思わなかつたぞ」

「え？」

掌打は、出席簿で受け止められる。鈴は恐る恐る顔を挙げ、声の主を確認した。

「ち、千冬さん？」

「織斑先生だ、バカ者」

バシンッ！　と、今度は無事、鈴の頭を捕らえた。

「まったく、お前は私に恨みもあるのか」

「だ、だつて。いきなり後ろから攻撃されるから、つい……。師匠だつて『後ろから声をかけてくるような相手は恥ずかしがりなんだ。なら、こっちから積極的に攻めてやるのが紳士の役目だ』つていつてましたよ」

「あいつは、碌なことを教えないな」

「まったくですね。見た目からして信じられませんし」

「そう、鈴は場を誤魔化すように笑った。

「笑うな」

バシンッ！　ともう一撃。

「すいません」

「そろそろSHRが始まる。さっさと教室へ戻れ」

「は、はい！　一夏、また後で来るから逃げないでよー！」

鈴は、逃げるよう自分教室へと戻つていった。

「あいつ、何しに来たんだ？」

「それより、鈴がIIS操縦者つてことに驚きだ。美鶴は知つてたか？」

「昨日会つたからな」

「なら、昨日教えるよー」

忘れてたんだよ。

「なあ、一夏、美鶴。今のは誰だ？ 知り合いか？」

「まさか、美鶴さんの恋人ではないですかよね？」

「まさか」

あれは、どちらかといつと手のかかる妹みたいなもんだ。箒と同類だ。

「とつと席に着け。お前たちも、痛い目見たいのか  
そこで、強制的に俺たちの会話は終了した。  
まだ納得していないようだが、箒は大人しく席に戻る。  
直感的に、自分のライバルだと感じ取ったのかもしね。  
こんな感じで、今日も一日が始まった。

「鈴は幼馴染なんだよ」

昼時の食堂。俺たちが昼飯を食べに来ると、そこには鈴が待ち伏せていた。

「幼馴染は私だろ！」

「箒はファーストだろ。美鶴がセカンド。鈴はサードなんだよ」

鈴は、箒が転校した後に入れ替わる形で転校してきた。箒と面識

がないのはあたりまえだ。

「で、こっちが笄。ほら、前に話しただる？ 小学校からの幼馴染で、俺の通っていた剣術道場の娘」

「ふうん、そうなんだ」

鈴は值踏みするように、笄を見た。

「はじめました。あなたとは、色々と気が合いそうだわ」

「ああ、お互いにな」

二人の間に、火花が見えた。お互いが、お互いの事情を正しく認識したのだろう。

「で、そっちの人は？」

「わたくしはイギリス代表候補生、セシリリア・オルコットですわ。代表候補生同士、互いに国の名に恥じない行為をいたしましょう」「ちなみに、俺の彼女」

「ぶはっ！？」

水を飲んでいた鈴が、勢いよく噴出した。

「汚いぞ、鈴」

「か、彼女！ 美鶴の！？」

俺の文句を無視して、鈴が詰め寄つてくる。

「千冬さん以外に、あなたの恋人になるような変わり者がいたの！」

？

「おい、さり気に千冬姉を変人呼ばわりするなよ」

「なんだか、侮辱された気がしますわ」

セシリリアと一夏は、眉をひそめて鈴を見る。

「あ、ごめん。悪気があるわけじゃないの。でもさ、美鶴の恋人だよ。徹底的な肉食主義で高級嗜好。女好きの癖に、好みにつるさい美鶴だよ」

うん、正しい評価だな。さすが幼馴染。

俺は女の子にちよつかいをかけるが、本気で好きになるのはそれほど多くないからな。

「そんな美鶴が、自分から恋人だなんて。つまり、そのレベルなの

ね

はあ、と深いため息を吐く鈴。

「一夏、なんでクラス代表なんてやつてゐるのよ。今すぐ交代したほうがいいんじゃない？ 今の一夏じゅ、セシリアに手も足もないでしょ」

「俺だつて、そうしたいんだよ……。でも、もう決まつたんだよ」「疲れたようになつて、もう一夏。はは、何が不満なのだろうな。

「一夏、なにを弱気になつて、いるんだ。男が最初からそんな態度でどうする。鳳、だつたな。お前も、一夏を舐めないとおうか」「舐める？ バカにしないでくれる」「む

一夏をかばう簫に、心外だというような鈴。

「私は、どんな相手でも舐めはしないわ。それが、誰だつてね」

その眼は今までとはちがい、刃物のよつに鋭い。しん、と場が静まり返る。

「ま、せつこうことだ。今度のクラス対抗戦、楽しくなりそうだな」「そうだな。鳳、非礼を詫びる。すまなかつた」

「いいわよ。あと、鈴でいいわ。私も簫つて呼ぶから

このよつな、さばさばした性格は鈴の美点だ。見ている分には、なかなか気持ちがいい。

「そうだ、私が一夏にE-Sのこと教えようか？ 舐めはしないけど、手応えがないのもつまらないし」

「いいのか？ あ、でも美鶴や簫に教えてもらつことになつてゐるんだ」

申し訳なさそうに、一夏はいつ。

「そうなの？ で、でもさ！ E-Sに乗り始めて間もない美鶴や簫より、代表候補生の私が教えたほうがいいんじゃない」

鈴は、一夏に詰め寄るようとそつこつた。

「ねつ？ 美鶴もそう思つでしょ！」

いつてることは正論だな。それに異論はない。あるとすれば、

「私は、いいと思つぞ」

「 篷？」

「 うん、私よりも鈴のほうが適任かもしけないな」

「 そう、篷は笑った。」

「 おいおい、何いつてんだよ。」

「 いいのか？」

「 ああ。それに、そのほうが美鶴もセシリ亞との訓練に集中できるんじゃないいか？」

「 なんだろう。今の篷は、何か気に入らない。」

入学式の日の夜もそうだったが、あの時とはまた違う感じだ。  
「 わかった。だけど、鈴一人だと負担があるだろ。俺たちに鈴も入  
れて合同訓練にする。そのほうが、互いのためにもなるだろ。」「  
一人でやるよりも、複数で訓練をするほうが効率的だ。自分の得  
手不得手によつて教えることや教えられることがある。模擬戦や多  
人數戦闘の訓練もできる。」

「 というのが、表向きの理由だ。」

「 ……それでいいわ。けど、私は主に一夏につくわよ」「  
「 それは時と場合による」

鈴は不満そうに顔を歪めた。

「 そういうえば、鈴。今、実家の中華屋はどうなつてるんだ  
一夏が、雰囲気を変えるように話題を変えた。」

「 実家がお店なのですか？」

「 そうだ。昔はよく一人で食べにいつたな」

「 ああ。今、親父さんは元氣にしてるのか？　まあ、あの人こそ病  
氣と無縁だよな」

「 あ、うん。元氣だつたよ。だけど、少し老けたかな」

「 なんだ、妙な違和感を感じる。」

「 それより、放課後つて時間ある？　久しぶりだし、どこか行こう  
よ。ほら、駅前のファミレスとかぞ」

「 あそこつて、去年潰れなかつたか」

「 じゃあ、学食はでもいいから。積もる話もあるでしょ」

ないだろ。一夏はこの一年は受験勉強だし、鈴も工Sの訓練ばかりだったはずだ。つまりは、一夏と一緒にいたいたいための方便だろ？」「いいけど、や」

一夏は、じかんを伺つて見ただ。

「……一夏の、好きにすればいい。一日くらいは、特訓を休みにしてもいいだろ？」

鶴が、そう答えた。それは、どこかぎこちなく無理をしてくるよう見える。

「いいのか？」

「私はかまわない」

「まあ、鶴がいいなら、俺もいいけど」

「わたくしも、いいですわ」

「そういうわけだ。だが、明日からはみっちりと扱いてやるからな」

「ああ、わかってるよ。なら、せつかくだし学外に行くか

「うん。じゃあ、放課後迎えに行くね」

鈴は嬉しそうに笑うと、ラーメンのスープを飲み干し片付けに行つた。

「そうだ。せつかうだしみんなで行かないか？」

一夏が提案した。案の定、一夏は鈴の意図に気づいていないようだ。

「悪いけど、バスだ。訓練機の予約してあるし、俺は訓練する」

「私も同じだ。私たちのことは気にしないで、存分に楽しんでくれるといい」

「そうか？ 悪いな」

そして放課後、一夏は鈴を連れ立つて教室を後にした。

その一人を辛そう笑いに見送る鶴が、やけに気になつた。

ザ・カード（後書き）

篇の脆弱を上手く書かたいと思ひます

## ファースト対セカンド（前書き）

なかなか話が進まないです

## ファースト対セカンド

イメージするのは、ISを動かすことじゃない。ISが、自分の一部だと思つこと。

この全身を覆う装甲は、装甲ではない。自分の体の延長だ。腕も、足も、指の先までがすべて自分の体。

ならば、後は何時もと同じだ。銃を抜き、目標を定め、引き金を引く。

「……ダメだな」

一連の動作の後、結果を確認する。

ダメだ、狙いよりも三十七センチ程ずれている。

「武装の展開速度も一秒ってところか。まだ遅いな」

「そうでもありませんわ。訓練を初めて一時間でここまでできれば十分ですわ」

「本当に、お前は規格外だな」

「でも、なんか上手くいかないんだよな。どうも、俺のISの間に何か挟まっているような、そんな感覚がする」

俺、セシリ亞、篝の三人は、アリーナで訓練を行つていた。使う機体は、ラファール・リバイヴだ。射撃武器をメインとする俺には、篝の使う打鉄よりも好みだ。

「適正が低いからか？」

「美鶴は、どれくらいなんだ？」

「Cだよ」

ちなみに、これはISの適正がS、A、B、Cの四段階しかないためにCとなつているだけ。実際は、今年の一年の中でもトップクラスに悪いらしい。そのせいか、どうもISが思つように動いてくれない。

「ま、初日はこんなもんか。じっくり行くぞ」

「そうですね。どんな武器でもそうですが、訓練時間と実力は

比例しますわ。最初から完璧にできると思つまつが間違いです

「だからこそ、毎日の研鑽が重要なわけだ」

と、三人が各自納得をした。

「じゃあ、最後の締めに模擬戦でもやるか。篝、相手してくれよ」「わ、私が！？」

なんだ、その驚きよつは。

「相手なら、セシリ亞に頼めばいいだろ？」「

「ヤダよ。今の俺じゃ手も足も出ないだろ？ 篝は俺と戦いたくないのか？」

「……戦いたい。私の強さを、美鶴に見せ付けたい。私は強くならなければならないから」

その言葉が、引っかかった。やはり、今日の篝はおかしい。

「では、わたくしが審判を勤めます」

「ああ、頼む」

ならば、戦いの中で確かめるしかないな。

「篝、全力でこい」

「もちろんだ」

俺は五五口径アサルトライフル・ヴュントを、篝は近接用ブレードを構えた。

「それでは、始め！」

俺はアサルトライフルを構えると、篝にフルオートで放つ。それを、篝は上空に逃げることで回避した。

ダメだ、狙いが甘い。ハーベーセンサーから送られてくる情報と、自分の意識がかみ合わない感じだ。ゴーグルとスコープを接続した感じと似ているが、あれはライフルを構える手間を無くすための処理だ。相手の位置情報やターゲットサイトなど、余計なものが多すぎる。銃撃の後の反動がないのも落ち着かない。

「はあ！」

気合と共に、篝が間合いに飛び込んできた。アサルトライフルで近接ブレードを受け流すと、ストック部分で殴りつける。

「つち！」

動作が遅い。箒は軽く後ろに避けるだけで、俺の攻撃は空を斬る。どうにも、ISの操縦では箒に分がありそうだ。

離れた箒に、再び銃撃。だが、結果は同じだ。訓練の時と実際に戦うのでは、やはりこれほどまで違う。

「なら、ちょっと弄るか」

ISの設定を変更。ハイパー・リンクを切断。これで余計なものはなくなつた。

箒の動きに合わせ、目測で銃を撃つ。

「さっきよりも狙いが鋭い！？」

うん、まあまだな。だいぶ何時もの感覚に近くなつた。それでもまだハイパーセンサーは有効だから、気分としてはドーピングモードに近い。

箒が加速し、銃撃を搔い潜る。俺はそれに合わせアサルトライフルから、近接ナイフを展開する。イメージは、腰のホルスターから逆手で抜く感じだ。

「なるほど、いい剣戟だ。成長したな、箒」

「お前に褒められるとは、私も捨てたものではないな」

ナイフとブレードを打ち合つ。接近戦では箒に敵わず、俺は防御に徹する。

「なあ、箒」

「今は試合中だぞ。話は後にしてくれ」

今だから、こそだ。戦いの中だからこそ、聞けることもある。

「最近、なんか様子が変わつたな」

「そうか？」

「前よりもずっと落ち着いてる。癪癪起こして一夏に当たることもなくなつたし、入学式の夜が嘘のようだ」

「私も、お前たちに負けてられないからな。過去から逃げずに、戦うことにしてたんだ」

そこに、箒のどんな思いが込められているかはわからない。俺は

筈のすべてを知っている訳ではないし、これからも知る」とはないだろう。

俺は、筈ではないのだから。

それでも、わかることがある。

「なんか、無理してない？」

「なに？」

筈の攻撃が、一瞬緩まった。俺は間髪入れず、攻めに転じる。

「な、卑怯だぞ！」

「いいから聞けよ。今日、鈴と一夏が遊びに行くこと許可しただろ？」

「それがどうした。別に久しぶりに再会した幼馴染と話すことも許さないほど、私の了見は狭くない」

「けど、辛そうな顔してたぞ。鈴も一夏のことを好きってわかったんだろう？」

「それがなんだ！ 私が一夏と鈴が会話するのを邪魔し、それでどうなる。それが、戦いなのか。それが強さなのか！」

筈の剣がぶれる。力任せの大降り。やり場のない思いを、剣に乗せているような攻撃だ。

これが、筈の本質。

方向性は変わつても、強さを求めるという弱さは変わつていない。別に、それは悪いことじゃない。自分が弱いからこそ、強くなろうとすることは悪くない。

実際、最近の筈は戦士としての道を歩き出していた。  
だが、速すぎたのだ。

自分の体力も考えず、ペース配分も気にしないで、足元も見ずにただ駆け抜けた。今までによかつた。一夏に声をかける女子は多くいたが、それは本気の好意ではない。言い方は悪いが、興味本位。その程度なら、筈は苦ともしない。

だが、そこに鈴が現れた。自分にも負けないほど、一夏を好きでいる。突然現れた、明確な傷害だ。その現れた障害に、足を取られた。

倒れて傷を負つたのにも気づかず、無理にまた走ろうとした。

その結果が、これだ。フォームもガタガタ。走るのも精一杯なのに、止まることをしない。止まる」とを考えてもいい。余計、自分を

追い込んでいるとも知らずに。

「お前は、昔から自分を追い込みすぎなんだよ。意固地になつて、すべて自分で押さえ込む。だから」

簫の懷に入り込み、ナイフを振るつ。シールドエネルギーを削り、そのまま回し蹴りを放つ。

「もつと我慢になれよ」

「私に、私にまた醜態を晒せというのか！　感情のまま、一夏に当たれというのか！」

「違う！　感情のままに戦えばいいんだよ。もともと、戦いつてのは自分の我慢でやるものだ。俺は千冬を愛してるから戦うし、セシリ亞も大好きだから戦う。一股上等！　どちらも欲しいんだからしようがないだろ！　お前も鈴に譲るな！　自分を蔑むな！　それは戦いじゃない、逃げだ！　一夏が欲しいなら戦え！　自分の我慢で、自分の好きなように、自分の思うがままに戦え！」

簫のブレードを避けると、握っている手をナイフで弾いた。ブレードが宙を舞う。

「それが、戦士だ！」

そして、簫を殴つた。思いつきり、全力で、一切の手加減なく殴つた。

「……ずいぶん、好き勝手いってくれるな」

簫が、ライフルを出した。俺は反射的に一步下がると、そこに銃撃が降り注ぐ。

「幼馴染かもしれない。年上かもしれない。だが、たつたそれだけですいぶんないようだ。お前は神かなにかのつもりか！　私はな、お前のそういうところが昔から気に食わないんだよ！」

簫が、叫んだ。

「ああ、そうさ。私は怖かつたんだよ。鈴と一夏が楽しそうにして

いるのを見て、それが気に食わなくて。だけどそれを認めたならまた昔の私に戻りそうで。だが、それが悪いのか！」

命中も満足に定まらず、闇雲に撃つだけの銃弾。箒は刀が本来得意とする武器なので、それも当たり前だ。だが、それは先ほどまでの剣筋よりも、俺を魅せた。

「私は、私が嫌いなんだよ！ 剣道だって、ただの豪さ晴らしでやっていた。すぐに暴力に走る。そんなこと、私が一番知っている！ だがな、そんなことをお前にいわれたくない！」

箒が走る。地に刺さっていたブレードを抜くと、そのまま俺に斬りかかった。

「ああ、いいや。そこまでいうのなら戦つてやる。まずは、あの横槍中國娘を倒す。そして、鈍感バカな一夏を私のものにする！ 邪魔するやつは切伏せる！ そして」

箒の太刀を、ナイフで受け止める。その攻撃は重く、俺は弾き飛ばされてしまう。

「まずは、何でも知ったような口を利く戦闘バ力を地面に這い蹲らせる。文句があるか！」

箒の目は、真っ直ぐと俺を見ていた。熱い熱を持ち、それでも怒りに囚われず打倒すべき相手だけを見ている。

「ああ、いい眼だ。くそ、一夏には勿体無く思えてきたぜ。

「ああ、文句なんてないさ。むしろ上等だ。いいぜ、箒。さあ、存分に戦おう。苦痛も、悩みも、迷いも、戦うことで乗り越えろ！」 箒がブレードを振りかぶり突撃する。俺はアサルトライフルを開し、それを迎え撃つ。

「来いよ、箒！」

「墜ちろ、美鶴！」

そして、

「はつ、やるじゃねえか！」

「私を、舐めるなよ」

コンマ数秒の差で、箒のブレードが銃弾より先に俺を捕らえた。

「勝者、篠ノ之筈」

セシリ亞の声が響く。俺はISを解除すると、その場に座り込んだ。

「ああ、クソ！ 負けたのは久しぶりだ。かつて悪い！」

敗北は何時以来だろうか。確かに一年ぶりくらいか？

セシリ亞が、俺たち二人に近づいてきた。

「でも、美鶴はまだISに乗り始めたばかりですし。適正のことも

……」

「関係ねえよ。負けは負けだ。いいか、次は負けないからな、筈！」

「ああ、そうだな。私も、もっと美鶴とは戦いたい」

そう笑う筈の顔は、今まで以上にすがすがしく輝いていたと思う。その顔を見たら、たまには負けるのも悪くないと思つてしまつた。

ちなみにその後、生身で木刀とナイフで戦いボコボコにしてやつた。俺は負けっぱなしは嫌いなんだよ。

## ファースト対セカンド（後書き）

二巻まで書けば一区切り付く予定です。その前に一巻と番外編を数話書くことを目標とします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3918x/>

---

IS-戦いを求めるもの

2011年11月2日03時11分発行